「フィールド=生きる範囲」

【登場人物】

高桑恒夫（タカクワツネオ・39／回想・1&2年前、38／高校生16）
高桑英太（息子・11/回想・1年前、10）

西風英子（ニシカゼエイコ・39／回想・アフリカ、29／高校生16）
西風元治（73・父）
西風芳野（71・母）

西風耕治（35・弟・一年前）
神林ムク先生（英子の夫／回想・アフリカ、40）

坂田健一（43・警察庁警備局、警備課理事官・警視正／大学生）
高桑剣士（ケンシ・警察庁警備局、警備課理事官/回想・2年前、43）

高桑剣士を撃つある男 （33）

高桑加代　（37・恒夫の妻)
恒夫の父
恒夫の母
高桑カオリ　(13・長女)
カオリの恋人（14・逃げる青年）

農業組合のリーダー柿田（39）
山代高齢者農夫婦（80）
松林（中年）夫婦
倉橋（高齢）夫婦
コンビニ店長(63)
×　　×
実業家・佐伯（58）
島原・有山村役場役場・開発担当者、小村（42)
島原・有山村役場長・寺田 (59)

所員Ａ
女子所員Ｂ
×　　×
小学５年生のタカハシハジメ（佐伯）
タカハシ（佐伯）の妹（7）

小学５年生の寺田

小学６年生のいじめっ子

×　　×
隣町の若衆（赤丸、黄丸、青丸、緑丸・27〜29)

村民たち・賛成派
村民たち・反対派

整備屋

【アフリカ】
少年兵Ａ（11・英子の息子、アキラ)
ジリア（28／回想・18）
武装集団バキラ(38・ボス)
バキラの部下（青年・少年たち）

領事警備員(38)
領事官(40)
坂田、部下２名
現地担当官(32)
風体の悪い男（33）

傭兵・山鬼（ヤマキ・37)
山鬼の子分、男Ａ・Ｂ

◯高桑家・リビング（東京・初夏）
　　大層、散らかっている。
　　写真を見つめている高桑恒夫（39・元警部)。
　　頬は痩せこけ、無精髭、
　　眼は落ち込んでいる。
恒夫「……」
　　【写真…両親、妻、姉、英太、そし
　　恒夫。家族揃って、笑顔を湛えている】
　　別の一枚を手に取る。
恒夫「……」
　　【写真…兄と恒夫。警察官の制服が凛々しい】
　　恒夫、その写真を捨て、
　　徐に自分の首を締め上げる。
　　顔が紅潮してくる。
　　「ウー……」
　　ドアが空く、バタン！
　　手を緩め、見上げる恒夫。
　　「…ボウッ、ブ、ハハハ……ハー……」
　　呆然と突っ立ている、
英太(11)「！！」
恒夫「ハーハー……ちょっとな……」
英太「……」
恒夫「大丈夫だ」
　　戻る英太。
　　×　　×
　　仏壇の前。
英太「……」
　　恒夫の両親、妻、娘、
　　そして、兄、剣士の遺影が並んでる。

◯高桑家・玄関
　　大きな一戸建て。
　　手入れもせず放ったらかしの庭。
　　出て来た恒夫、一点を見つめる。
　　バスケットボールだ。
　　傍に立つ錆びついたバスケットボード。
　　頼りなげな動きでドリブルし、
　　シュート……、
　　大きく外れる。
　　恒夫　「（息切れが激しい）ハーハーハー」

転がるボール。
×　　×
バン！
ボールが勢いよくシュートされる！
振り向く恒夫。
男　「ヤァ！」
警察庁警備局の坂田健一警視正(43)だ。
恒夫「……」
坂田「……（じっくり見て）大丈夫か？」
恒夫　放っといてくれ」
坂田　「長崎、行かないか？」
恒夫　「帰ってくれないか」
坂田　「……自分を虐めるな」
背向ける恒夫。
坂田、回り込み、
一枚の写真【西風英子(39)】を掲げる。
坂田　「覚えあるか？ 」
手に取る、恒夫。
恒夫　「！？」
坂田　「今、百姓してる」
恒夫　「（じっくり見る）」
坂田　「どうだ？」
恒夫　「……」
行く。
坂田　「一番、嫌いだって……」
止まる。
恒夫　「……」

◯回想・高校時代
廊下。
バスケットボールをドリブルし乍ら
駆けて来る恒夫(16)と、
バスケボールを抱え乍ら来る英子(16)、
が顔を合わせるなり、
英子　「走っちゃダメじゃない！」
恒夫　「バーカ！」
英子　「バーカ！」
×　　×
再び、階段で出会う２人。
英子　「サイテー！」

恒夫　「お前もだ！」
　　去って行く英子ー、
　　彼女の残り香に反応し、
　　漂う匂いを深く嗅ぎ、
　　うっとりする恒夫。
　　彼女が去って行った廊下を眺める。
恒夫　「（ポカン）」
　　ボールを落とす。

◯元の高桑家・庭
坂田　「彼女、大学の後輩だったんだ。横切るといい香りがするんだな」
恒夫　「……」

◯妄想
英子　「英子です。よろしく」
　　彼女の香りに鼻腔を膨らませ、
　　トロンとする坂田（大学生）。

◯元の高桑家・庭
坂田　「フラれた。呆気なく。メチャクチャ嫌いなヤツがいて、タイプがソイツと正反対だからって言うんだ……どう思う？」
恒夫　「……」
坂田　「ってことは、ソイツがタイプってことか？」
恒夫　「……(窺う）」
坂田　「是非、ウラを取らないとな」
恒夫　「……西風英子（ニシカゼエイコ）」

◯回想
　　廊下で、
英子　「サイテー！」
恒夫　「お前もだ！」

◯元の高桑家・庭
坂田　「彼女、手伝ってやってくれないか？」
　　恒夫、顔を背ける。
　　目を瞑る。
恒夫　「（僅かに頷く）」
坂田　「線香、上げさせてもらっていいか？」

恒夫　「今日は、よしてくれ。悪い」
坂田　「わかった、手土産だ。ここへ、置いとく。英太君の好物だ」
　　家の窓を伺うと、
　　×　　×
　　汚れた窓の隅から、
　　英太(11)が虚ろな目で覗いている。
　　×　　×
坂田　「英太くん、大事にしろよ」

◯警察庁警備局・坂田のデスク
　　電話を手に、
坂田　「渋々頷いた」
英子声「マジ！ツネオがね？」
坂田　「頼んだからな」
英子声「はいはい、仕方ないなぁー」
坂田　「それと、息子さんの手掛かり、掴めそうだ」
英子声「もう、いいの。止めて……」
坂田　「そう言うな……もう少し待っててくれ」
　　『死体の前で、黒人少年兵に混じって
　　Ｖサインの日本人らしい少年』
　　の写真を手にする坂田。

◯長崎のある里山（有山町）
初夏。
荒れ果てた農地（耕作放棄地）が目に付く。

タイトル『フィールド＝生きる範囲』（仮題）

　　トラクターが唸る。
　　掻き上げた跡、小鳥たちが突つく。
　　クラクションが響く。
　　プ、プーッ！
　　エンジンを切る、
英子(39)「（叫ぶ）なーにぃ？」
　　やって来た山代農夫婦(80)。
夫(80)「スーツもんに渡すんイヤだ。アンタに頼みてぇ」
英子　「言ったでしょ。借り賃払えないっ

て」
妻(75)「いいんだ。使ってくれれば。あや
つらなんて。先祖に申し訳ねえだ」
英子　「判るけど、手、廻らないんよ」
夫　　「この通り、頼む！」
妻　　「使ってねェとさ。早よハヨって、つ
け込んで来るんさぁ」
　　夫、拝む、妻も。
夫　　「考えてくんよ」
英子　「あのー、とにかく、顔、上げてよ」
　　×　　×
　　ププププー。
　　４WDダットサンが現れる。
　　×　　×
英子　「あーぁ」
　　英子の背後に身を隠す山代農夫婦。
　　恰幅のいい柿田(39)、
　　のそのそやって来て、
柿田　「おお、いいところに居んねぇ。じ
っちゃん、ばっちゃん。早よ、サインして
けれよ。待ってるんじゃけんよ」
　　英子の背後から、
夫　　「イヤじゃ！金、金、金、楽、楽、
楽、言ってるモンには売らん！！」
柿田　「じっちゃん、そう言うな。今なら
大金じゃ。仕事も用意するって言うちょる
んじゃ。やらなきゃ損じゃ！」
夫　　「アチさ、行け～！」
英子　「アンタ！そんな事言いにきたの。な
ら、さっさと帰って！」
柿田　「違っけん、違っけん。たまたま、じ
っちゃん、ばっちゃん、居たからさ、言っ
たんよ。悪かか？」
英子　「ふーん。そうかしらね」
柿田　「エッちゃん、オラ、相談役しちょる
けんね。役場に頼まれたっちゃ、断れねえ
べぇ。だからさァ」
英子　「だから、何？」
妻　　「ナンも無けりゃ、黙って帰んさい」
柿田　「……あ、いや、その一、最近、会っ

てねえだろ。エッちゃんにさ……」
英子　「ン、まぁー、何それ」
柿田　「オラー……顔見たかったんよ」
英子　「バカじゃないの！私と争ってんのよ」
柿田　「けどよ、エッちゃん……」
妻　　「そうだー、ホンマ、バカじゃねえの」
柿田　「……会いたかったら、会ってもいい
だろうに」
妻　　「なーに、惚気てんだ」
英子　「だったら、役場の悪代官に止めろっ
て言って！『大規模農場に反対だ』って！」
柿田　「んなこと、出来ねぇ！」
英子　「柿ちゃん！」
柿田　「……もう、行ぐわ」
　　４WDダットサン、去って行く。
夫　「ウチらも帰るべ。英子さん、考えてく
れろ」
英子　「そんな事言わんと、一緒に戦いまし
ょ。ねっ！」
夫　　「でも、カラダがなぁ……」
妻　　「この通りだけん」
　　２人、ヨタヨタと軽トラに向かう。
　　途中、振り返り、深々礼をする。
　　英子、手を振り、
英子　「一緒に頑張りましょう」
　　２人、軽トラに乗り、
　　ノロノロと走り去って行く。
英子　「……」

◯突っ走る軽ジープ（ジムニー）
　　英子、ギアチェンジし、ぶっ飛ばす。
　農地を駆け抜けるジープ。
　突然、止まる。
『有山村役場大規模農場予定地』の
　立て看板を打ち付ける作業員。
英子　「ったく！」
　アクセルを踏み込む。

◯長崎島原・有山村役場•（中）
　　ドカドカと来る英子。

開発担当者、小村(42)と鉢合わせ。
英子　「なんなのあの立て看！」
小村　「開発農地という事を皆さんに知って
もらおうと思って……」
英子　「早すぎない？」
小村　「そのぅ、村の未来を考えてのことな
んで、少しでも早く……」
英子　「だからか……あのさ、柿ちゃんに何
か言った？」
小村　「いえいえ、何も。村の為なんだって
必死に頑張ってますよ」
英子　「ふーん……珍しいわね」
小村　「それは英子さんの方が、ご存知で、
幼馴染なんでしょ……」
英子　「そうね、ご褒美って、何かしら？」
小村　「ご褒美！ああ、計画纏まればさ、農
場長になるんですよ」
英子　「ふーん、で、言えなかったのね」
小村　「英子さん！そこ、そこなんです。
そこを何とかもう一度考え直してください
よ。村のために、農地を提供してくれんで
すか。そ、そうだ！柿田くんと一緒に農場
長を二人三脚でやれば……お似合いじゃな
いですか。わたくし、推しますよ」
英子、机を叩きつける。
英子　「何、言ってんの！ホント、村のこと
考えてんの」
小村　「モチロン！」
英子　「ああっ、ゴメン！アンタじゃないわ」
小村　「ええ？」
英子　「えーっと、（大声で）役場長のお墨
付きか知らないけど、佐伯っていう悪代官
いますか？それともブローカー何だか知ら
ないけどさ、あのバッカに会わせてくれる」
小村　「アッチャー、英子さん、それは、ち
ょっ、ちょっと言い過ぎじゃ……」
英子　「これくらい、言わないと、やってら
れないわよ！」
小村　「でも、えっ、あのう、そのう、急に
言われましても」

英子　「何なの？」
　　背後から肩を叩かれる。
男(声)　「失礼……」
　　英子の前に廻り込む、
佐伯(58)「(ニッコリ)」
英子　「！？」
　　取り繕う、
小村　「佐伯様、あー、ちょっと興奮して……
　あのー、ご勘弁を……」
佐伯　「私、バカですか？」
英子　「そんなこと言っちゃいましたか」
佐伯　「少し、よろしいですか」
英子　「ええ」
佐伯　「私が佐伯と申します。一度、ゆっくり
　話したいと思ってたんだが……」
英子　「わたしもよ。でも、手短にね」
佐伯　「西風さん、あなたの所が一番欲しいん
　だ」
英子　「それで……」
佐伯　「それで……西風さん、あなた自身も魅
　力的だ」
英子　「聞きたくありません。話を先に進めて
　ください」
　　大仰に頷き、
佐伯　「大規模農場にして米や野菜を作ろう
　じゃないか。そして、どんどん、出荷する。
　食品加工もする。販売もする。ブランド化
　して、レストラン、店舗も経営し、廻す。大
　きな歯車だ。私はその廻るシステムを構想し
　た上で言ってるんじゃ。付け焼刃じゃない。
　この村も潤う。人も集まる」
　　英子、佐伯をじっくり見定め、
英子　「どうだか？村で働く人のことなんか全
　く頭に入ってないでしょう。彼らは百姓です。
　ずーっと鍬を握ってきた人たちです。７０、
　８０の年配者がほとんどです。ここは、彼ら
　が、ひたすら、生活の生業として米を作り、
　野菜を作ってきた百姓の土地なの！」
佐伯　「だから、寂れてくるんだ」
英子　「（睨む）」

佐伯　「西風さん、栄えるためには多少の犠牲は付きものだよ」
英子　「それが気に入らないの」
佐伯　「それにだ、事業が巧くいけば人も集まって来る。それこそ活性化だ」
　　拳を握りしめ苛つく、
英子　「（睨み付け）バーカ！」
佐伯　「勘違いしては困るんだよ。知っての通り、私は、寺田役場長の代理で動いてる。しかも、一つ付け加えておくが、すべての判断も私に任されてる。お判りかな？だから、スムーズに終わらせたい。よく考えてくれ」
英子　「それが……」
佐伯　「ここに未来を作るんだ」
英子　「あなたの未来でしょ。よーく考えるのはそっちの方よ。里山のこと村人のことをよーく考えるのは、佐伯さん。あなたの方じゃないかしら。撤退してください！それと、そうね……こちらも一つ付け加えさせてもらいますわ。立て看、抜いといて！決定した訳じゃないんだからさ。じゃ！」
　　と吐き捨て、出て行く。
　　残された、
佐伯　「小村くん、君は何の為に居るんだ？」
　　突っ立てる、
小村　「いえ……あのう、そのう、まさか」

◯同・表・駐車場
　　運転席の、
英子　「あー、もう」
　　急発進する。

◯駅前を通り過ぎるジムニー
　　赤信号に引っかかる。
英子　「もうっ！」
　　親子連れが横切る。
英子　「？」
　　ジムニーを止め、駆けて行く。
英子　「ツネ、ツネオー」
　　振り返る、恒夫と英太。

恒夫、英太「！？」
英子　「ツネオ？恒夫なの」
恒夫　「ああ」
英子　「明日じゃ……なかった？」
恒夫　「だけど、来たんだ」
英子　「あー（頷く）」
　　英子、英太を見て、
英子　「息子さん？」
恒夫　「ああ」
英子　「（頷き）そう、じゃ、乗って！」

◯農道を行くジムニー
　　バックミラーを覗く英子
　　恒夫、黙って外を眺めてる。
英子　「ツネオ……」
恒夫　「（僅かに目を遣る）」
英子　「あの……ツネオなんだよね……」
　　ミラー越し、反応待つ英子。
恒夫　「……」
英子　「……いや、いいわ」
　　田畑が流れて行く。
　　バックミラー越しに、
英子　「（英太に）で、君の名前は？」
英太　「（返事しない）」
　　恒夫、英太を小突く。
英太　「（黙ってる）」
恒夫　「オイ！」
英子　「……」
英太　「（黙ってる）」
英子　「それは困ったな」
英太　「（黙ってる）」
恒夫　「エイタ！」
英太　「英太……」
英子　「そう、エイタくんね。私は英子。
　でさ、エイタくんさ、私の英子のエイは
　英語の英だけどエイタくんのエイは？」
　　恒夫、小突く。
英太　「一緒……」
英子　「そう、そうなんだ。（恒夫に）へ
　ー、一緒なんだ。で、いくつ？」

英太　「１１」
英子　「１１か……」

◯田畑を突っ走るジムニー
英子　「どうして、来る気になったの？」
恒夫　「あいつが言うからさ」
英子　「坂田さん？」
恒夫　「ああ」
英子　「で、ホントに来た」
恒夫　「おれの事、全部知ってるんだな？」
　　英太、父を見る。
英子　「まぁーね（伺う）」
　　窓外を眺めている恒夫。
英子　「私のことは？」
恒夫　「知らない」
英子　「何にも？」
恒夫　「……（英子を見る）」
英子　「気にならなかったの？」
恒夫　「ああ」
英子　「そう……」
恒夫　「一つだけ知ってる」
英子　「？」
恒夫　「フったんだって」
　　英子、急ブレーキを掛け、飛び出る。
二人　「！？」
　　荷台からバスケットボールを取り、
英子　「出て、恒夫！」
　　面倒臭そうに出る恒夫。
英子　「見て、こっち」
　　顔を上げる。
英子　「じゃないでしょー、このー！」
　　ボールを投げつける。
　　咄嗟に受ける恒夫。
英子　「ホー、イケるじゃない」
　　ボールを撫でている恒夫。
英子　「頂戴！」
　　投げる恒夫、
　　受け取る、
英子　「ナイス。イケるイケる、もう一丁」
　　また、投げる。受ける恒夫。

ボンヤリ見ている英太。
数回、繰り返し、
英子　「恒夫、強かったもんね」
投げる。
受け取った恒夫、歩み寄り、渡す。
恒夫　「もういい」
ジムニーに乗り込む恒夫に、
ボールを投げつける、
英子　「も、一丁」
恒夫、反応せず、
背中に当たったボール転がって行く。
その行き先を見遣る恒夫。
止まる。
ボールを拾い、英子に渡す、
恒夫　「おせっかいはムカつく……」
車に乗り込む。
英子　「（呟く）こっちこそ、ムカつく」
傍に来て英太、
英子の匂いを嗅いでる。
英子　「？」
英太　「おばさんって」
英子　「おばさんじゃないわよ」
英太　「触っていい？」
英子　「どうしたの？」
手を取り、匂いを嗅いでる。
英太　「（クンクン）お母さんの匂い……」
英子　「そう……（車内に目をやる）」
恒夫、ジッと見てる。
恒夫　「……」

◯回想・高校時代
誰もいない廊下。
残り香を嗅ぎ、うっとりする恒夫。
バスケボールが零れ落ちる。
ポトリ。
そこへ、戻って来る英子。
英子　「！？」
恒夫　「クンクン、クンクン」
英子　「……ツネオ、何してるの！」
恒夫　「えっ、あっ、まぁ……」

ボールを拾い、駆けて行く。

◯西風の家

畑の中に建つ家屋の敷地に、
ジムニーが滑り込む。
目の前にバスケットボード。

恒夫　「！？」
英子　「（気付き）ヤッちゃぁ悪い？」
恒夫　「……いや」
英子　「どうぞ」

廻りを眺める二人。
集荷作業場、
農機具倉庫兼物置、
家庭用菜園の奥に、
茅葺の母屋。

英太　「（目配せし）おウチ？」
英子　「そうよ」
英太　「大きいね」
英子　「鍵も、開いてるよ」

進む、英太。

英子　「ばあちゃん、寝てるけどさ」

英太、立ち止まる、
が進む。
続く、

英子　「（振り返り）恒夫も！」

蹲み込んでる、恒夫。

英子　「大丈夫？」
恒夫　「ああ」
英子　「……」

手を貸す英子。
拒む恒夫。

英子　「ダメ！」

おもむろに脇を抱え、立たせる。

恒夫　「……」
英子　「お互い、甘える時は甘えなきゃ」
恒夫　「……クラス一、嫌いなオレを呼んでくれて……すまない」
英子　「それ、イヤミ。一番嫌いだった私に」
恒夫　「……」

英子　「行くわよ」

◯同・住居・居間
仏壇を覗き込んでる英太。
×　　×
２枚の遺影。
『夫、神林ムク(40)』
『弟、耕治(35)』
下段には、
『晃（アキラ・６ヶ月、長男）』
の写真と
傷んだ小さな靴が１つだけ並んでる。
×　　×
英子　「大きくなってたら、英太くんと一緒
かな……」
英太　「ふーん」
恒夫　「（英子を見遣る）」
英子　「（呟く）一緒……」
英太　「こっちは？」
英子　「ダンナさん」
英太　「こっちは？」
耕治を指す。
英子　「弟」
英太　「（英子を伺う）」
英子　「（遺影を見つめてる）」
英太　「……」
恒夫　「……」
英太の頭を撫で、
英子　「母を紹介するわ」

◯同・祖父母の部屋
襖を開けると、
寝息を立てている芳野(71)の
傍に跪坐く、
英子　「（耳元で囁く）恒夫くんが来てく
れたのよ。東京の時のさ、高校のクラスの」
芳野　「（鈍く反応し）ああー、そう、そ
う、うん……」
英子　「うんうん。そうよ。分かったわ…
…（恒夫に）耕治が亡くなってから、気力

なくしちゃって」
恒夫　「……」
突然、震えだし固まる、
英太　「（囁く）死ぬよ」
恒夫　「なんて言った？」
英太　「もう時期、死ぬ」
恒夫　「！」
腕を掴み、強引に引き摺り出す恒夫。
英太　「（喚く）だって、一緒だもん。姉さんも母さんも一緒だもん。死ぬ前、すごーく寂しい感じ一緒だもん」
英子　「！？」
後を追う。
目が宙に漂う芳野。

◯同・表
英太　「離してよ！」
振り払う英太。
恒夫　「死ぬなんて言うな」
離れる英太。
×　　×
英子、追って来て、
英子　「大丈夫？」
恒夫　「すまない」
英子　「どうしたの？」
恒夫　「見ての通り、おかしなことを言う」
英太の後姿。
×　　×
英太　「……（涙、拭う）」
×　　×
英子　「おかしなことを言う…か？」
恒夫　「……」
英子、英太に歩み寄り、
「あそこ、見える？」
英太　「……どこ？」
×　　×
小山が見える。
×　　×
英子　「山の麓。あそこにね、じいちゃん、居るの」

英太　「じいちゃんって？」
英子　「私のお父さん」
英太　「ふーん」
英子　「畑、作ってるの」
英太　「何で？」
英子　「生きるためよ」
英太　「……」
×　　×
恒夫、倉庫で鍬を物色してる。
英子（声）「ツネオ！」
振り返る、
恒夫　「！」
英子に寄り添う英太、
そのシルエットが亡き妻を思い出さ
せる。。
こちらを向き、手を振る、
英子　「明日から働いてもらうわ、いい」
恒夫　「あ、ああ……」
クラクションが響く。
プ、プ、プー。
振り返る、３人。
×　　×
ノッソ、ノッソやってくる元治(73)。
×　　×
英子　「父よ」
恒夫　「高桑です」
見廻し、鍬で遊ぶ英太を指し、
英子　「で、この子は英太君」
元治　「ほーう。幾つじゃ？」
恒夫　「１１です」
元治　「１１か……１１のう（英子を見遣る）」
英子　「あー、じゃ、やり掛けの仕事あるか
らさ、戻るわ。部屋、２階だからね。お願い」
行く。
元治　「任しちょれ」
元治、鍬を手に弄ぶ英太の側へ。
恒夫も。
元治　「おおー、まだまだじゃな」
英太　「（一歩、退く）」
元治　「貸しちょれ」

英太の鍬を取り、
手早く畝を捌いていく。
英太　「ウワァ〜」
恒夫　「……」
元治、鍬を差し出す。
英太、引っ掻き、引っ掻きするが、
土がバラけるばかり。
英太　「もういい」
鍬を渡す。
英太　「こんなの、おもしろい？」
元治　「そうだにゃ、半分はおもしれぇ、
半分はおもしろくねぇ」
首を傾げる、
英太　「どうしてやるの」
元治　「半分おもしれえーからだ」
英太　「ふーん……」
元治　「おめえさんなら、分かるのう…」
蹲み込んでる恒夫。
元治　「どげんした？」
恒夫　「……大丈夫です」
元治　「そうが」
元治、トマトをもぎ取る。
元治　「これ、完熟じゃ、旨えぞ」
恒夫　「ええ、じゃ」
じっくり見て、齧り付く。
元治　「どうじゃ？」
恒夫　「ええ、いけます」
元治　「ボン、ほれ」
差し出す。
英太　「要らない……」
元治　「そうけ……勿体ねぇ」
齧り付き、
元治　「自分で喰う分は、ここで作っちょ
るんじゃ。薬さ、使わんとさ。んだ、旨ぇ
んだ」
恒夫　「農薬なし。ふーん」
元治　「そうだー、ワッハッハッハー。毎
日、喰ってけろ。あんたも、力、つけんと
のう」

◯ある畑（夕方）
トラクターで耕す英子。
×　　×
農道に停車中の乗用車から
覗く小村。
小村　「（双眼鏡を渡す）彼女だ」
受け取り、覗く若衆、赤丸(29)。

◯西風家・２階、元、耕治の部屋（夜）
寝返りをうつ、恒夫。
隣の布団で、
寝息を立ててる英太。
恒夫　「……」

◯同・祖父母の部屋（１階）
芳野、寝床の上で正座し、
『故郷』を口ずさんでる。
芳野　「うさぎおいし、かの山、こブナつ
りし、かの川……」
入って来る元治。
芳野　「（気付き）耕治、お帰んなさい。
どげんだった、畑……ゆ〜め〜は」
元治　「耕治はのう、あぁ……（口つぐむ）」
芳野、続きを歌い出す。
「いまも、めぐりて、忘れがたき、
ふるさと」
元治　「かかあ、もう、遅い。寝るべ」
と、寝かしてやる。
芳野　「そうね、おとうさん」
元治　「んだ、んだ……」
×　　×
聞き耳を立てていた、
英子　「……」
その場を離れる。

◯同・英子の部屋（１階、祖父母の部屋・奥）
手紙（エアーメール）を見る英子。
（英語or現地語）。
『日本人で息子さんらしい人を見た
という噂を聞きました。歳の頃も十一、

二です。きっと、生きてます。諦めな
いで下さい。探し続けます。……守っ
てやれなくて悔やみきれません。農
薬を使わない夢の畑、楽しみだわ。
弟さんのためにも成功して下さい。
ジリア」
＊英子の（声）モノローグに変っていく。
英子　「……」
写真を見ている。
コンゴ在住当時のスナップ、
英子（29）とジリア（18）
幸せいっぱいの笑顔。

◯同・居間
耕治、ムクの笑顔、
そして、汚れた１つの靴。
仏壇の前。
震える手で、
注いだウイスキーを流し込む。
英子　「……（堪えてる）」

◯同・食卓（次の日）
朝摘み野菜、卵焼き、味噌汁、
質素な朝食。
英太、卵焼きを食べる。
英太　「……」
席を立つ。
恒夫　「（睨む）」
英太　「（首を振る）……」
出て行く。
恒夫　「（立つ）」
英子　「（制し）行くわ」
留まる恒夫。
元治　「まぁ、食べんさい」

◯同・祖父母の部屋
寝てる芳野を見つめる英太。
英太　「……」
英子(声)　「英太君、居る？入るわよ」
英太　「（俯いてる）」

英子　「どうしたの」
　　英太、芳野を見たまま、
英太　「う、うーん……」
　　英太の頭を撫で、
英子　「英太くん」
英太　「……お母さんの……食べたい」
　　英太の顔を伺い、
英子　「そっか……」
英太　「父さんのせいでもう食べれない」
英子　「……」
　　英子、英太を抱きしめる。
　　されるままの英太ー窮屈そう。
芳野　「（囁き）か、かりん」
英太　「おばあちゃん、何か言ってる」
　　英太、芳野の口元に耳を宛てがう、
芳野　「……カリン……トウ（呟く）」
英太　「カリン、トウ……って？」
英子　「黒い棒で、甘いヤツ。知らないかなぁ。
　これ位の（手で形作る）」
英太　「ああ……（首を傾げる）」
英子　「大好物なの」
芳野　「（目覚め）おいしいよ」
英太　「！？」
英子　「あら、起きちゃったの。おはよう」
英太　「（呟く）カリントウ」

◯元の食卓
　　卵焼きを見つめていた恒夫、放り込む。

◯農道を走る軽トラ
　　ガタガタ揺れて、来て、止まる。
英子　「ここが、人参畑」
　　×　　×
　　緑が拡がる畑。
英子　「ここには、玉ねぎ植えてるの」
　　畝が整然と並んでいる。

◯駆け抜ける軽トラ。
　　急ブレーキ、止まる。
　　バックすると、
　　『有山村役場大規模農場予定地』の

立て看板。
英子　「ったく！」
出て、引き抜く。

◯軽トラ・車内
英子　「取れって言ったのに。もう」
恒夫　「？」
英子　「決まった訳じゃないの！」
恒夫　「……」
英子　「たまんないわよ、まったく。先祖代々の農地を取られてたまるかよー！くそッ！」
恒夫　「やっぱり、英子だ！」
英子　「何言ってんの！失くなったら恒夫も困るでしょ」
恒夫　「まぁぁ……」
英子　「早く、覚えてよ！」

◯ある畑
恒夫、
土を掬う鍬、飛び散る。
再び、掬う、飛び散る。
英子　「あぁ～？教えてもらったんでしょ」
恒夫　「ああ」
英子　「いい」
恒夫の手に、自分の手を重ねる。
恒夫　「！……」
英子　「右手、少しズラして、握る。そうそう……で、一緒に合わせてよ。引いて、掬い。ヒョイっと、乗せる感じかな。いい、もう一度」
一身一体となって動いてる。
恒夫　「分厚くなったな」
英子　「何が」
恒夫　「手」
英子　「（突き放し）生きてくのに必死なの」
鍬を掬い、
恒夫　「（呟く）でも、良い匂いだ」
英子　「ん？何か……」
恒夫　「いい手だ」

◯耕作放棄地

緩やかに傾斜した畑の麓。

元治　「ボウズ、おっかー、頼むんぞ」

英太　「うん」

ラッパ（豆腐屋さんが使う）鳴らす。

整地部分を登って行く元治。

英太、ロッキングチェアーで寛ぐ、

芳野の廻りでパフパフしている。

パーフー！

英太　「かりんとうって、そんなに美味しいの？」

芳野　「（頷くだけ）」

英太、ラッパを元治に向けて、

何度も鳴らす。

×　　×

中腹で草刈機を唸らせている、

元治　「（振り返る）」

パフパフする英太。

元治　「（笑ってる）」

◯別の畑

トラクターで畑を打つ英子。

鍬を捌き、汗を拭う恒夫。

レバーを操作し、転回する英子。

土を掴み、匂いを嗅ぎ、

空を見上げる、恒夫。

英子、ドリンク持って来て、

英子　「これ」

土まみれの手をはたき、

恒夫、受け取る。

英子　「ウチはさ、今有機やってるの」

恒夫　「有機……」

英子　「農薬、使わないの」

恒夫　「へーっ……」

英子　「身体に悪いから……」

恒夫　「ふーん、考えてるんだ」

英子　「弟がね、言ってたの。で、父と、ちょっと揉めてるの」

恒夫　「で、……」

頭抑え、しゃがみ込む恒夫。

英子　「恒夫！」
恒夫　「……いつものヤツ、休めば大丈夫」
×　　×
木陰で休む恒夫。
恒夫　「で、父さん、どうした？」
英子　「ううん、また、こんどね」
ドリンク、飲み干し、
トラクターに駆けて行く英子。
見送る恒夫。

◯耕作放棄地で、
草を刈る元治、
戯れる英太、
眠っている芳野が、
紅く染まっていく。

◯広い畑（夕景）
トラクターを操る英子。
木陰で見つめてる恒夫。
恒夫　「（呟く）すまんな」
エンジン切り、叫ぶ、
英子　「帰ろうかー！」
大きく手を振る英子。
返す、恒夫。

◯満天の星と月の輝きが畑を覆う

◯西風家・庭〜菜園（朝）
恒夫、バスケゴールにシュート。
外れ、ボール転がる。
×　　×
トマト、切る元治。
籠にはキュウリが数本。
恒夫　「（来て）おはようございます」
元治　「えれぇ、早ぇの」
恒夫　「ゆっくり休めたので」
元治　「そうかの、良かの」
トマトを摂り、
元治　「どうじゃ？」
恒夫　「いいです。すみません」

元治　「トマトばっかじゃの」
恒夫　「イヤー……旨いですよ」
元治　「ハハハハッ、（喰らい付き）一生こ
　んなことしてるんよ」
恒夫　「いやー、僕には務まりません。イ
　イんじゃないですか。英子さんも手伝って
　るし」
元治　「そかのう。じゃが言うても、これ
　しか出来んもんのう……」
恒夫　「そんなこと……」
元治　「ただ、土、弄るだけ。人様に迷惑
　かけんとさ、土だけ弄らせてくれればそれ
　だけで生きてコレたんよ。こんようなこと、
　もう出来んようになったんかのう」
恒夫　「でも、英子さんは……」
　　元治、トマトを摘む。
元治　「……アイツまで失の一たくねぇ」
恒夫　「……」
元治　「農地を守ろうと歯向かってるんじゃ
　がのう。もし、拗れてさ、足引っ張るってな
　ことにでもなったらべぇ、おられんようにな
　るっちゃよな……心配じゃ」
　　行く。
恒夫　「……」
　　×　　×
　　窓から伺ってる、
英子　「……」

○ある畑
　　軽トラから堆肥を畑に撒く、
恒夫　「これって、臭かねぇなぁ」
　　シャベルで掬い上げ、均一に撒く。
英子　「熟成してるから、臭わないの」
恒夫　「ふーん、そうなんだ」
英子　「じゃ、あと、２０往復位かな」
恒夫　「まさか、２０往復なんて、キツ
　かよー」
英子　「あらあら、なまっちゃってんの」
恒夫　「よか」
英子　「よかよね」

英子も手際よく撒く。
恒夫　「そう考えると、やっぱ、強いな君の父さん」
英子　「どうかな」
恒夫　「だって、こんな広いところ、世話してきたんだろ。しかも、一つじゃない。それをズーッとだ」
作業しながら、
英子　「それが百姓なのよ」
恒夫　「……君のためだろ」
英子　「そんなことない」
恒夫　「聞いてみなよ」
英子　「イヤよ！」
恒夫　「分かんないよ」
英子　「バーカ、生きてくために、決まってんでしょ」
恒夫　「ああ〜、バカってなんだよバカって？」
英子　「バカだからバカなの。悪い！ウフッ、ウフフフー」
恒夫　「高校っ時、よく言ってたよなぁ。ワハハハハハ〜」
英子　「フー、やっと、笑った、恒夫」
改まり、
英子　「……この前、言いかけたけどさ、父はさ、有機が気に入らないの」
恒夫　「身体にいいんだろ。どうして？」
英子　「農薬使わないから虫が来るの。廻りの畑にも影響するの、草も生えるし、煙たがる人もいる」
恒夫　「廻りも、今さら、有機するっていう訳にもいかないよな……」
英子　「手間暇かかるし、リスクも多い、コストも掛かる。で、今は思ったほど高く売ることができない。まだまだ、市場が小さいし、先が読めないし」
恒夫　「厳しいなぁ」
英子　「でもさ…有機ってさ、野菜が健康なの。化学物質とか吸収してないの、だから、美味しいし、アレルギー出ないって喜

んでくれる人もいるの。土も痩せないし…
これ、弟の夢だったのよ。そんな人のため
にもなってるワケだしさ。だから、私もや
ってるのよ……父さんのコトも分かるんだ
けどさ」
恒夫　「…で、大規模農場にしようって問題
が一丁噛み。これはどうなんだ？」
英子　「（黙る）」
恒夫　「おれも、ここの一員だ。教えてくれ」
英子　「……それって尋問！？」
恒夫　「悪い、そういうつもりじゃ……参っ
たな」
英子　「（笑み）分かったわ。有機とは関係
ないの。先祖代々受け継いだ私たちの農地を
取り上げようとしているの。冗談じゃないわ
よ。役場とあろうものが。雇われブローカー
の佐伯。役場担当の小村。そして、事もあろ
うに幼馴染の柿ちゃんまでも。年老いた人た
ちはどうすんのよ。今更、雇われなんて辛い
よ……」
恒夫　「で、役場長は？」
英子　「寺田さんね、まぁ、お飾りかな。判
押すだけ」
恒夫　「そうか、なかなか……だね」
英子　　「なにそれ」
恒夫　　「ごめんごめん……今はこの有様だ、
力になれない。が、いずれな」
英子　　「アテにしてイイのかな、ツネオくん
！」
恒夫　　「どうかな……」
英子　　「ツネオ！！」
恒夫　　「カーッ、やっぱ強い！きっと、勝つ
よ！」
　　英子の顔に笑みが拡がる。
英子　「この一、恒夫ったら」
恒夫　「イッヒヒヒヒー」
　　×　　×
　　滑り込んで来る、４WDダットサン。
柿田　「山代さん夫婦。揃って（手を首に宛
て）、吊ったけん！」

英子　「（呆然）」
恒夫　「！」
柿田　「相談に来てっちゃろう。なに話し、
　しとっちゃのー。無下に返したんけー。ど
　うよー」
英子　「無下に返したって！」
　　スタスタと歩み、柿田にビンタ張る。
英子　「ンなこと、しとらん！柿ちゃん、
　あん時、何言うた。畑、売れ、売れって、強
　引に捲し立ててたよね。それがイヤなのよ。
　分かってんの？」
柿田　「そがん言うなって」
英子　「無下になんか返しとらん！」
柿田　「我が、帰った後、まだ、話し、しよ
　っとったべー、何言っとたのー」
英子　「（モノローグ）…一緒に戦いましょう」

◯山代農夫婦宅・前
　　佇む英子と恒夫。
英子　「……」
　　×　　×
イメージ
　　明滅のパトカーと慌しく動く、
　警官と鑑識。
　　鴨居に揺れてる山代老夫婦の死体。
　　が、浮かび消えて行く。
　　×　　×
恒夫　　「（震えてる）」

◯走る軽トラック
　　ハンドル握る英子。
　　×　　×
妄想　　銃弾で吹っ飛ぶ、身体のシルエット。
　　×　　×
　　窓外を眺める恒夫。
　　×　　×
妄想　　１発の銃弾で倒れ崩れる、シルエット。
　　×　　×
英子　「……」
恒夫　「……」

◯耕作放棄地
傾斜面で草刈り機を回す元治。
麓で英太がラッパを鳴らし、
はしゃいでる。
チェアーでウトウトしてる芳野に、
「ネェネェ……」
芳野　「（顔を向ける）」
英太　「かりんとう、あげるね」
芳野　「（頷く）」
英太　「信じてね！」
パーーフーーと鳴らす。
斜面にへばり付き、草を刈る元治。

○農道走るジムニー
元治　「タバコ買うけん。かかぁ、待っちょれ」
芳野　「（頷く）」
英太　「僕もいっていい？」
元治　「ああ……」

○コンビニ
駐車場に入って行くジムニー。
英太　「近いんだね」
元治　「さっきんとこ、歩くんと十分ぐれえかな」
英太　「走れば３分！」
元治　「わしゃ、走らねぇ。辛うけん」
×　　×
コンビニに入る、英太と元治。
元治　「どげんや？」
店長(63)「見ての通りさぁ。なんぞ、文句あっがー！」
ガランとした店内。
元治　「相変わらず不機嫌じゃのう。柿田っちに馘切られんぞー」
店長　「わしゃ、柿ちゃんのお陰で元気なったっちゃ。たとえ火の中水の中、こん店、守るっちゃーからね」
元治、ピースを指し、
元治　「これ」

店長　「〇〇円じゃ」
元治　「百姓、止めか？」
店長　「当たりメェよ、喰えねぇ。おんま
　ーも、早よ、売れ。ゴテてたら、進まんじ
　ゃけんよー。柿ちゃんの言う通りすりゃ間
　違えねぇ。早よ、早よ、エッちゃんによー、
　進めてくれってばよー」
元治　「柿田っちにのー……そんより、ほれ、
　こまっ子、連れてんよ」
　　マンガ、立ち読みの英太。
店長　「おう、あん子か。（囁く）刑事さんの」
元治　「おおー、よう、知っとうのう」
店長　「田舎じゃ田舎。じゃけん、柿ちゃんが
　気にしとったどー」
元治　「ほうけ。（叫ぶ）おお、行くべ！」
　　マンガに夢中の英太。
　　元治来て、
元治　「ほら、行くべ」
英太　「もうちょっと、いい？」
元治　「おい、店長。かか送って、戻ってくる
　けん、頼むわ」
店長　「ええ！」
元治　「待っちょれよ。分かったけぇ」
英太　「（返事ない）」
元治　「すぐ、戻るけんの」
店長　「おーい、エッちゃん頼むよー」
　　行く。
　　×　　×
　　ジムニー出て行く。
　　×　　×
　　外を伺う英太、
　　ジムニーはいない。
　　マンガを戻し、ウロウロ、
　　立ち止まる。
英太　「（呟く）かりん……」
　　かりんとうだ。
　　廻りを伺う、
　　接客中の店長。
　　かりんとうを盗み、
　　出て行く英太。

店長　「ありがとう、またね！」
　　客を見送る先に、
　　駆けて行く英太。
店長　「！？」
　　手にはかりんとう。
　　飛び出る、
店長　「コラーッ！」
　　呆気なく捕まる英太。
　　そこへ、
　　４WDダットサン、
　　滑り込んでくる。
柿田　「！？」

◯走る軽トラック
英子、恒夫「（沈黙）」

◯西風家・庭
　　元治、ジムニーに乗り込む。
　　プップウー！
　　英子、恒夫、帰って来る。
英子　「どこ行くの？」
元治　「ボウズを迎えにさぁ」
英子　「どこ？」
元治　「コンビニさ」
英子　「おいて来たの」
元治　「マンガ、読んでたけん」
英子　「買ってやったらよかったのに」
元治　「んだな」
英子　「私、行くわ」
元治　「そうか」
恒夫　「すんませんね。煩わせちゃって」
英子　「かあさんは？」
元治　「寝とるけん」
英子　「そう。行こうか」
恒夫　「ああ。すまない」
　　×　　×
　　プップー！プー！
　　クラクションが響く。
　　ダットサンが滑り込んで、
　　助手席のドアが開く。

柿田　「オイ、出て来い！」
　　出て来る英太。
３人　「！？」
　　柿田、かりんとうを出す。
柿田　「盗んだっちゃよー！」
英子、元治「！」
恒夫　「（形相が変わる）」
　　英太、柿田の背後に隠れる。
恒夫　「すまない。許してくれ。この通り
だ」
　　深々、礼をする。
恒夫　「失礼します」
　　英太の首根っこを掴み、
　　引き摺り出す。
柿田　「！」
英子　「！」
元治　「！」
恒夫　「ヤッタな！」
　　睨む英太。
恒夫　「オレへの当て付けか！」
英太　「……（黙り）」
恒夫　「オレに恥をかかすな！」
英太　「だって……」
　　ビンタを張る恒夫。
　　飛んでいく英太。
英子　「ツネオ！」
　　駆けつけ英太を庇う英子。
　　恒夫、再び、柿田に詫びる。
恒夫　「本当に申し訳ないことをした。ど
うか、勘弁してくれ」
　　再三、頭を下げ、千円札、二枚出し、
恒夫　「これで納まる訳ではないが、代金
として受け取ってくれ」
英子　「ツネオ……柿ちゃんも。もういい
でしょ」
柿田　「もう、いいじゃ。そだことよりさ。
盗まんように教えちゃれよ。どんが教育しと
んだよ。もと、刑事さんだっちゃんだろ！」
　　恒夫、英太を引き連れ、
恒夫　「謝まるんだ！」

英太　「（黙ってる）」
恒夫　「英太！」
　　拳を掲げてる。
英太　「……ご…」
恒夫　「どうなんだ！」
英太　「ご、ごめんなさい」
柿田　「んだ。もう、すんなよ」
　　深々とお辞儀をしたまま。
　　恒夫、千円札２枚を
　柿田のポケットに捻じ込む。
柿田　「要んねぇってば！」
　　札を抜き取り、捨てる柿田。
　　落ちる札。
　　札を拾い、見上げる、
恒夫　「（凝視）」
柿田　「……盗人と暮らすんなんて、エッちゃん、考えんさいよ」
　　行く。
　　英子、恒夫から札を取り上げ、
英子　「柿ちゃん！」
柿田　「なん？」
　　英子、駆け寄り、
　　無理矢理、握らせる。
英子　「持ってって！」
柿田　「だげん？」
英子　「それ、貰うわよ」
　　かりんとうを取る。
柿田　「分がった。んじゃ、こんなに要らねえ」
　　札を差し出す手。
英子　「要らない！」
　　収まりがつかない札を握り潰す、
柿田　「こげんもんが好きなんかねぇ。都会っ子は、分がんねえ。気を付げんとな、しかし、こぎゃん人来てから、首は吊るし、ロクな事起きんなぁ」
元治　「首！」
英子　「（頷く）」
元治　「どげん？」
英子　「山代さん夫婦さ、自分で命を絶ち

なはったのよ」
元治　「えええー……山さんが……」
　　頷く英子。
柿田　「エッチャン、気ィ付けるんよ！」
　　行く。
英子　「……」
　　恒夫、英太を掴み、
　　英子と元治の前に差し出す。
恒夫　「謝るんだ！」
英太　「（二人を見つめてる）」
恒夫　「早くしろ！」
英子　「英太君」
元治　「ボウズ」
英太　「だ、だって、だって」
恒夫　「英太」
英太　「だって、死んじゃうからさ」
恒夫　「英太！」
英子　「！？」
元治　「！？」
英太　「父さんのせいだ、母さんも、姉さ
んも死んだ……何で、何で」
英子　「！」
元治　「！」
恒夫　「黙れ！盗みはイケないんだ」
　　英太、英子からかりんとうを奪い、
　　駆けて行く。
恒夫　「英太！」

◯同・祖父母の部屋
　　かりんとうを食べてる芳野。
　　そこへ来た、
英子、恒夫、元治「！？」
英太　「おいしい？」
　　袋を手に、黙って食べる芳野。
英子　「母さん、おいしい……」
英太　「今日、食べたいって言ってたんだ」
　　英子、元治と見合う。
　　その場に立ち尽くす、
恒夫　「……」

◯回想・繁華街・一角（１年前）
店長　「ドロボー、捕まえてくれー！」
通り掛かった恒夫(38)、
「！」
追い駆ける。
逃げる青年(14)、
車の間を駆け抜けて行く。
ジグザグ、
握るネックレスがキラキラ光る。
車、避け、追う恒夫。
青年、角を曲がる。
突然の車、避けられない！
宙に舞うネックレス、
キラリと光り、落ちて行く。

◯高桑家・リビング（１年前）
カオリ(13)「なぜ、死んじゃったの？」
恒夫　「俺は追っただけだ」
カオリ　「だからよ……父さんが追うからよ」
泣き崩れる。
介抱する、
妻、加代(37)「仕方ないの、事故なのよ、カオリ」
カオリ　「追わなきゃよかったのに。追うから
よ」
恒夫　「見逃すわけにはいかない。カオリ、
盗みだ、いいワケないだろ。オマエもアイツ
なんかと。どうして？カオリ、何してたんだ」
カオリ　「アレ、私が欲しいって、言ってたも
のなの……」
加代　「カオリ」
生気なく佇むカオリ。
何気に見ている英太(10)。
×　×
鴨居に揺れてるカオリ。
隣一、
ロープの輪に首を入れる加代、
カオリの死顔を見つめ、
足元の立ち台を蹴る。
ガタン！
駆けてくる英太。

「（呆然）」
揺れる加代とカオリ。
佇む英太の虚ろな目。
×　　×
老夫婦のシルエットが揺れている。
×　　×
恒夫　「……」

◯西風家・ダイニングキッチン（夜）
英子　「……」
風が畑を揺らし、ざわつく。
雲が月を覆っていく。

◯回想（１０年前）
撃たれ倒れる兵士。
大ナタで首を切られる女性。
ムクの笑顔に一発の弾丸。
襲われるジリア。
泣き叫ぶ赤ちゃんを
攫う黒人少年兵。
蹴り飛ばされる自分（英子）、
手にした銃を恐る恐る放つ。
倒れる兵士。
弾けるマシンガン。
砕ける壁、次々、倒れて行く人間。
汗まみれで交わる裸体。
被さる男の行為で、
揺れる英子の目に涙が浮かぶ。

◯元のダイニングキッチン
英子　「……」
震える手で、
グラスにウイスキーを注ぐ。
香りを嗅ぎ、口に運ぶが、
躊躇い、止める。

◯同・外
出て行くジムニー。
×　　×
恒夫の部屋ー、
音に気付く恒夫。

英太は寝ている。
×　　×
祖父母の部屋ー、
身を起こす、
元治　「……」
×　　×
恒夫、静かに、
ダイニングキッチンへ。
ボトルの傍に置かれたグラス、
を手にし、眺める。
恒夫　「……」
元治(声)　「アンタもか」
恒夫　「ええ、音がしたもんで」
元治　「柿ちゃんとこ、行っきょるかな」
恒夫　「こんな夜に」
元治　「車さ走らせて気晴らしだとさ」
恒夫　「でも、これ（グラスを掲げる）…
…車！」
元治　「大丈夫じゃけん。ワッパ握るとき
んさ、飲まんちゃ」
恒夫　「そうだといいんですが」
元治　「前、良く行きょった、柿んち。パ
ーッと駄弁ってさ。ケロッとして戻るんさ」
恒夫　「最近は？」
元治　「なかね……久しぶりじゃねえ」
恒夫　「（頷く）」
元治　「帰って来てから、これよ」
元治、キャビネットを開ける。
酒が並んでる。
元治　「よせっ言っちょるよ、けんど、止
めぇやせん」
恒夫　「私も……そうでした」
元治　「ほーう、そうね……アイツも、分
っちょる、思うんけんがな」
元治、２つのグラスと日本酒を出す。
元治　「オラ、これだ。ウイスキーは好か
んじゃ。で、今はどがん？」
日本酒を注ぐ。
恒夫　「止めてるんです」
元治　「ほうか。じゃ、オラ、コレ飲んだ

ら寝るだ」
一気に呷り、
元治　「農地買収なんて、なけりゃさー、
いらん事考えんでよかとにね」
出て行く。
恒夫　「……」

◯柿田家・玄関
英子　「今日のこと、言わないで！」
柿田　「分かった。店長にも言っどく」
英子　「ありがとう……あん子らは？」
奥では、酒とテレビをアテに、
若衆(27〜29)、がドンチャン騒いでる。
柿田　「隣町のモンよ。役場でさ、出会っ
てよ。今、しちょること興味あるんだって
ば、盛り上がってちょ、ここん来たっさい。
どや、ちょっ、飲んできゃ」
気付いた若衆の１人、
赤丸　「！？、あんら、まぁ。キレか、ち
ょ、来んさい、飲も」
青丸、黄丸、緑丸も振り向き、
青丸　「あー、羨まし。柿ちゃん！」
柿田　「こらこら、ウルセー」
英子　「いいわ。車だし！」
柿田　「そう言うなって、いいっちゃ。久
し振りじゃけん、飲も、飲も、ほんに、嬉
しかとよ」
英子　「（見つめ）もう一つ、お願いあるの」
柿田　「なんね？」
英子　「こっち」
若衆の目に入らない様に、
柿田を引き寄せる。
柿田　「どした……」
英子　「（見つめている）」
柿田、唇を寄せていく。
手で阻止する英子。
柿田　「ムッ、あっ……つい……」
×　　×
陰で盗み見の、
赤丸　「（呟く）向こうから来だすったべ

よ、まっこと、チャンス、チャンス」
戻って行く。
×　　×
英子　「佐伯に協力しないで！」
柿田　「……」
英子　「と言うか、諦めさせて！」
柿田　「なんこと言う？」
英子　「出来る？」
柿田　「はー、だったら……」
強引に唇を奪う。
答える英子。
が、突然、離す柿田。
「すまねぇ、それは、出来ねぇ！」
英子　「（睨み）」
出て行く。
×　　×
戻る柿田。
赤丸　「ありゃ、キレいさ子は？」
柿田　「いんだ」
赤丸　「そりゃ、ねえべ。ちょっくら、見てくべぇよ」
柿田　「よせ」
行く若衆たち、
赤丸　「心配なか」
青丸　「オラも、へへっ」
黄丸　「ついでだ。挨拶してくるべ」
緑丸　「そうだにゃ」
一同、一気に出て行く。
柿田　「まったぐ、どいつもこいつも」
酒を煽る。
テレビが騒いでる。

◯同・外
ジムニーの赤いテールランプが
消えて行く。
続いて、
無灯のバンがゆるりと
静かに走り出す。
しばらくして、点灯。
若衆たち、

「やったー！」
「決めるぞ！」
「イエー！」

◯走るジムニー

◯尾ける若衆の車

◯西風家・表
出て来る恒夫。
バスケットボードの上空には、
煌めく星々。
恒夫、シュート……外れる。
転がり止まるボール。
恒夫　「……」
軽トラのドア、開ける。
キー、付いたまま。
恒夫　「……」

◯ハンドルを握る英子。

○若衆の車、ジムニーに追いつく。

◯柿田家・中
テレビを切る。
静か。
柿田　「！」
玄関ドアを開ける。
誰もいない。
柿田　「！」
慌ててダットサンに乗り込む。

◯ダットサンを飛ばす柿田
◯ある道
様子を伺いながら、
慎重に軽トラを運転する恒夫。

◯走るジムニー
後ろの光芒が気になる英子。

◯距離を保ちジムニーを追う若衆の車

◯注意深くハンドルを握る恒夫

◯掘立て小屋に面した広い道
ジムニーを追い越す若衆車、
急停車し、英子の前方を塞ぐ。
キキーッ！
英子　「！？」
赤丸が車から下りる。
英子、ガラス越しに伺う。
ニコニコやって来る赤丸、
サイドガラスを示し、
赤丸　「開けてくんろ、柿田さんに頼まれちゃっでよ」
英子　「なんなの？」
サイドガラスを開ける。
英子　「危険よ！あんな止め方はないでしょ」
赤丸　「すまん、すまん。カーアクション好きなんだべさ」
瞬時に、
手を突っ込み、ドアを開け、
英子を引き摺り降ろす。
英子　「ウワァー、何すんのよ！止めて！」
赤丸　「オラにもチューして欲しい。エエん、カラダが欲しいけんの」
周りを囲む、青丸、黄丸、緑丸。
「オラも。オラも。次はオラだ」
と口走ってる。
英子　「何、ワケ解んないこと言ってるのよ！」
抵抗し、赤丸を倒す。
赤丸　「アウ！」
一同　「強え！？」
赤丸　「（起き上り）こぎゃんなー！」
と挑みかかる。
続いて、若衆も加勢。
抵抗し続ける英子、結構、強い。
しかし、相手は４人、捩伏せられる。
掘立て小屋の中に引摺り込まれ、
赤丸に覆い被さられる。

英子　「（睨み付ける）」
赤丸　「タマんネェーじょー」
×　　×
遠く前方に道路のど真ん中に
止まっているジムニーと乗用車。
恒夫　「！」
ライトを消し、進む。
掘立て小屋が見え、
中に蠢く人影。（奇声と呻き声）
恒夫　「！？」
下りる。

◯飛ばす柿田
「何もなけりゃええんがな……」

◯元の掘立て小屋
胸を露わにされ、
ショーツを引き剝がされる英子。
「（目を見開き）」
×　　×
回想　つん裂く銃声、赤ちゃんの泣き叫び一。
黒光りの大きな肉体が私の上で蠢く、
が、どうにもならない。
滴る汗と血を、涙目で堪えるだけ。
×　　×
赤丸　「（ゴクリ）」
被さる。
瞬間、
恒夫　「ウオォーーーリャーー！」
丸太ん棒を赤丸に叩き付ける。
バタリと倒れる赤丸。
恒夫が豹変。
狂喜乱舞一、
素早いパンチが次々、炸裂、
青丸、黄丸と叩きのめしていく。
英子、身を立て直し、
逃げる緑丸を追い仕留める。
戻ると、
鉄パイプで何度も何度も執拗に
赤丸を叩きつける恒夫。

英子　「ツネオ！」
　　赤丸は為されるまま動かない。
　　英子、恒夫の腕を取り、
　　「ツネオ、止めて！死んじゃう」
　　止まらない。
英子　「ツネオ！」
　　駆けて来た、
柿田　「やめんさい！」
　　と、身体を押さえ込む。
恒夫　「！（覚醒）オ、オレは……」
　　鉄パイプが落ち、転がっていく。
柿田　「どげんした、オイ！」
英子　「あっ！柿ちゃん」
　　再起した青丸、黄丸、緑丸、
　　柿田、英子、恒夫に不意打ちを
　　喰らわし、赤丸を抱え逃げていく。
　　痛みを堪え、起き上がる、
英子　「う、う、うー、待ちなさい！」
　　ヨロヨロと追う。
　　続いて、恒夫、柿田も。
　　間に合わず、逃げられる。
　　佇む３人、グッタリ。
英子　「……恒夫、一体どうしたの？」
恒夫　「……判らない、ただ……やるし
　かない……」
柿田　「おんまぁ、ドギャンつもりよ。
　殺したかー？」
恒夫　「……彼女を助けなきゃ、それだ
　けだ」
英子　「ありがとう、でも……」
柿田　「死んじゃったらどぎゃんするつ
　もりねぇ？あんた、刑事さんじゃろ！エ
　ッちゃん。こぎゃん、男、大丈夫かいの
　う？」
　　柿田をマジマジ見る、
英子　「あのさ、どうしてココへ……ま、
　まさか。知ってたの」
柿田　「えー、んなことねえべ。オラもビ
　ックリさ、エッちゃんに挨拶だっちゅう
　てさ、出たまんま、誰も居ないんださ…

…ほんな、変な気がしてさ、飛ばしたっ
サァ」
英子　「なんでこうなるの。どう言うこ
と？知ってんでしょ」
柿田　「知らねぇーよ、とっ捕まえて聞
くっちゃ」
英子　「隣町のモンって、何で隣町、偶
然、役場にいたの？」
柿田　「だから、知らねえっちゃと言っ
とるがー！そんがことより、盗人の子
が居るっちゃと思えば、こな、凶暴な
親っちゃ！こっちも、怖かけん。なー、
デカさんよ」
英子　「黙ってて！」
恒夫　「……」
柿田　「……わがった！」
行く。
立ち止まって、
柿田　「あんことは約束するっちゃ、エ
ッちゃん。黙っちょるっけ。（振り返る）
だけんど、こんなオレをば、頼ってくれ
てあんがとよ」
行く。
英子　「古い付き合いでしょ……」
柿田　「そがな」
去って行くダットサン。

◯西風家・ダイニングキッチン
２人、雪崩込み、
英子はグラスにウイスキーを注ぐ。
見守る恒夫。
英子　「どうぞ」
恒夫　「……（受け取る）」
英子　「ありがと」
グラス、掲げ、飲み干す。
恒夫、飲まない。
英子　「どうしたの」
グラスを置く、
恒夫　「……救急箱は？」
英子　「いいの。これが薬よ！」

ウイスキーを注ごうとする英子の
グラスを取り上げる。
恒夫　「よくない。どこだ？」
英子、食器棚の上から救急箱を取って
戻ってくる。
英子　「どうぞ」
渡し、グラスを取り返す。
英子　「飲まなきゃやってられないのよ」
恒夫　「（呟く）そうだな」
英子　「そうよ、カンパイ」
呷る。
箱を開け、処置の準備をする恒夫。
一心不乱だ。
英子　「（様子を見て）巻き添えにしてし
まって……もう出てった方があなたの為み
たい」
恒夫　「そう思ってたところだ。俺がい
るとロクなことが起こらない。英太も含
めてな…」
英子　「あの子を責めないで」
恒夫　「……あいつの母と姉さんは、こ
のオレが殺したようなもんだ。それか
ら、兄貴と、父と母と俺が家族全てを…」
英子　「止めて！」
恒夫に注いだ、グラスを取り、
英子　「呑んだら」
恒夫　「（見つめる）止めたんだ」
英子　「そう、じゃ」
飲み干す。
英子　「堪らないわ」
さらに、注ぐ。
恒夫、ウイスキーを取り上げる。
恒夫　「止めとけ」
英子　「！？」
恒夫　「止めるんだ！」
英子　「ったく、返して！」
恒夫　「……聞いたよ。やれば、できる」
英子　「そんな事どうでもいいわ、半年も
生きてない子が攫われて……夫も殺された。
家が滅茶苦茶。血だらけ、茹だるような暑

さ、堪らない…アフリカなんて大キライ！
……ずーっと、私を苦しめるの、生きてる
か死んでるか分からない……私は、自分を
失くし、銃を取り、傭兵まがいなことをし
たわ……一人残らず殺してやるんだと……
意味なく人を殺していった……私は」

× ×

モンタージュ

泣き叫ぶ赤ちゃんを
攫う黒人少年兵。
ムクの笑顔に一発の弾丸。
蹴り飛ばされる自分（英子）、
手にした銃を恐る恐る放つ。
倒れる兵士。
弾けるマシンガン。
砕ける壁、次々、倒れて行く人間。
襲われるジリア、
被さる黒光りの裸体が蠢く。
空に漂う英子の目に涙が浮かぶ。

× ×

英子　「そんな時、息子の世話してくれた
ジリアが私を探し出して、連絡してくれた
のよ。息子に似た人を見たって。でも、多
分、見間違いよ。もう、死んでるわ……そ
の方がさ……スッキリよ、考えなくて……
ジリアもさ…酷い仕打ちをされ、苦しんで
るのに…私のことなんか……私の周りの人
たち、皆んな傷付いていくの。堪らない、
何で、こうなるのよ！」

英子、恒夫からグラスを取り返し、
並々と注ぎ、それを暫く見つめる。

恒夫　「オレも酒浸りだったんだ」

英子　「（見る）」

恒夫　「止めてるところだ。辛い。が、君
に逢えた」

英子、グラスを置く。

恒夫　「……」

英子、グラスを見つめている。
涙が溢れてくる。
グラスを投げ捨てる。

ガッチャーン！
堰を切った様に涙が零れ落ちる。
×　　×
英太、目覚める。
×　　×
恒夫、英子の唇を奪い、
抱きしめる。
口から首筋、乳房へと愛撫し、
恒夫　「（囁く）もう、逃げたくない」
英子　「（頷く）」
英子を突然離し、
英子　「！」
恒夫　「……ここに居たい」
英子　「……」
服を剥ぎ、押し倒し、
恒夫　「俺が……助けないといけない。
罪滅ぼしだ」
強引に口で口を塞ぐ恒夫。
×　　×
陰で覗いている英太。
×　　×
絡む、英子と恒夫。
英子　「（瞳が憂いでる）…ここを守
らないと」

◯妄想　　耕治のトラクター転倒。
車体に押し潰されてる耕治。

◯祖父母の部屋（夜）
バッと跳ね起きる芳野。
「耕治、耕治！（叫ぶ）」
目が覚める、
元治　「大丈夫、大丈夫、うなされよー
うん、うん、疲れたにゃー」

◯有山村役場・駐車場（次の日）
ダットサンから下り、
駆けて行く柿田。

◯同・新規拡張農地準備室
ドア前に控える小村。

正座の赤丸、青丸、黄丸、緑丸。
彼らを睨みつける佐伯。
赤丸の頭は包帯グルグル巻き。
佐伯　「（トーンを落とし）どういう事だ
相手は女だ」
若衆、俯いたまま。

◯同・廊下
ぐんぐん来る柿田。

◯同・準備室
ガチャ、ガチャ！
乱暴に入って来る、
柿田　「おい！？」
瞬時に阻止する、
小村　「ああっ、柿田さん！」
佐伯、若衆たち「！」
小村　「あの、いけま、せん……ちょっと」
佐伯　「おー、柿田くん……」
柿田　「（無視）」
ジワリと若衆に詰め寄り、
柿田　「この一、おまんら、騙しやがって、
　え一、許さん。クソーッ！」
拳を掲げる、柿田。
佐伯　「柿田くん！」
柿田、振り返る。
佐伯　「一体、何だ！手を降ろせ。柿田くん」
柿田　「どぎゃんことー？ならねぇー！」
佐伯　「ま、まぁ、落ち着け。私が一番欲し
　い農地、知ってるな」
柿田　「んまぁ」
佐伯　「あの女の農地だ！」
柿田　「あの女……」
佐伯　「そうだ。幼馴染だからこそと思えば、
　すんなりと……それが行かない。グズグズ、
　グズグズ……だからだ、少々、手荒い方法だ
　が脅せと彼らに頼んだんだ。しかしだな、襲
　えとは言ってない」
柿田　「（睨んで）で、オラをうめえ具合に
　利用しただ！」

佐伯　「君がサッサと進めないからだ」
柿田　「クソッ！」
　　赤丸の首根っこを掴み、
　　「どぎゃんして、あんごとした」
赤丸　「魔、魔が射してよ」
　　締める。
赤丸　「いいカラダしてっちょよー」
柿田　「なんがとー！」
　　引き摺り回し、なぎ倒す。
柿田　「おんまーらも、おんなじだわさ。
　殴らせろ、一人づつ、おんらー！」
　　怖じ気る若衆たち。
佐伯　「柿田くん！ここは、私の仕事部屋
　だ！揉め事は止めてくれ！」
柿田　「！だげん……（気を沈める）」
佐伯　「今、叱ってたとこだ。確かに、お
　前らは遣り過ぎだ。（若衆に）分かってる
　のか」
　　佐伯、若衆たちを見下し、
佐伯　「柿田くんに、頭下げとけ」
若衆たち「どうもすんませんでした」
佐伯　「柿田くん、ここは、私に免じて気
　を取り直してくれ。でもな、いずれにしろ、
　早く、ケリをつけてくれ」
柿田　「先生、いんま一度、あん場所、考
　え直してくれんかのう、そん方が」
　　一呼吸置き、
佐伯　「いいかね、柿田くん、これは公な
　事業です……何とかしたらどうだ！どいつ
　も、こいつも！小村君！」
小村　「はい」
佐伯　「連れ出してくれ」
　　佐伯に導かれ一同、出て行く。
佐伯　　「柿田君、君も頭を冷すんだな」

◯ある畑（荒起し）
　　トラクター、方向転換中、
　　畦に乗り上げ、大きく傾く。
　　グィーン！
恒夫　「！！」

気付く英子、
「（叫ぶ）ダメー！エンジン切って！」
傾いたまま、止まる。
恒夫　「ハー……」
駆けて来た、
英子　「あー、危なかった……無理しちゃダメ！怖いんだから」
英子、手際よく、修正し、安定させる。
恒夫　「へー」
真剣な英子。
恒夫　「……餅は餅屋だな」
英子　「（降り、汗を拭い）そうね、ずーっとやってればさ。ねぇ、ビール飲みたいね」
恒夫　「ダメだ」
英子　「ビールくらい」
恒夫　「我慢しろ。水だ」
英子　「小さいのだけ……」
恒夫　「ダメ」
英子　「あ、そっ！変わったね」
恒夫　「君もだ」
英子　「ハイ、ハイ、じゃ、草刈り、やって！あそこ、よろしく」
恒夫　「（見る）あんなに？！」
英子　「そっ」
恒夫　「強ェーー」
×　　×
草刈機が唸りを上げる。
なぎ倒されて行く草々。
覗く地肌。
手際よく進む草刈機。
草ボウボウ農地を刈って行く恒夫。
鳥たちが虫を啄ばみに来る。
×　　×
トラクター、操縦の英子、
時折、恒夫を確認。
×　　×
唸る円盤。
舞い上がる草の破片。
恒夫　「……」
×　　×

辺りを見渡す。
草ボウボウが拡がってる。
×　　×
恒夫　「！！！」
草刈機を置き、飛び出す、
恒夫　「（手を振り、叫ぶ）オーイ、車借りる」
英子　「ええっ！どうしたの？」
恒夫　「後で！」
英子　「どこ行くのよ？恒夫！」
ジムニー、乗り込む恒夫。
英子　「（駆けて来る）ねぇ、どこ行くの！」
恒夫　「役場だ」
英子　「えっ！それ何、待って！」
飛んでく、ジムニー。
英子　「ツネオ！（スマホ出す）父さん、車、回して」

◯西風家・庭
自家用菜園で手伝ってる英太。
元治　「（スマホ）分かった……ああ、ボウズか、大人しく手伝っちょるよ（切る）」
鍬で捌く英太。
元治　「上手になっとるわい。おお、一緒じゃ、畑、行くが？」
英太　「いい」
元治　「は？」
英太　「行かない！」
元治　「しょうんなかんべ。ほな、おばぁ、見ちょってくれよ。分がったけ？」
英太　「（頷く）」
◯有山村役場・新規拡張農地準備室
ドアが開く。
恒夫を制す、
小村　「困ります。今は……」
押し退ける、
恒夫　「教えてくれ、なぜ弱い者を苛める！」
デスクから目を遣る、
佐伯　「なんともまぁ、これはこれは、珍らしいお客さんだ。噂は聞いてますよ。で、お

名前は？」
恒夫　「高桑だ」
佐伯　「私に何用かな？」
小村　「佐伯様、止められなくて、誠にすみ
ませんでした……」
佐伯　「まぁいい、丁度いい、君も居てくれ。
その方がいいだろう」
恒夫、姿勢を正し、
恒夫　「今一度、考え直してもらえないか。
反対する者のことも考慮して、別の解決策を
検討してみては頂けないか」
佐伯　「うん…そんな事はやり尽くした結果な
んだよ。だからこそ、こうして、役場が陣頭指
揮をとって、やってるんでしょうが。何を言っ
てるんですか。それに、君、あの女性のところ
が一番欲しい農地なんだ。是非とも」
恒夫、深々、頭を下げる。
恒夫　「頼む。もう一度、考えてくれ。（小
村にも）もう一度、お願いだ！」
頭を下げたままの恒夫。
小村　「頭を上げて下さい……」
佐伯　「よしてくれ、無理といったら、無理
なんだ」
恒夫、頭を、さらに下げる。
恒夫　「この通りだ」

◯同・駐車場
ジムニーの横に、
滑り込む軽トラ。
◯元の新規拡張農地準備室
英子、入って来る。
続いて、元治。
英子　「ツネオ！？」
恒夫、頭を上げ、英子を見る。
恒夫　「！」
英子　「（佐伯を睨む）」
佐伯　「あらー、いい所に、いらっしゃった、
西風さん。今ね、この通りだ。（恒夫に）さ
ぁさぁさぁ、君、頭を下げればイイってもん
じゃないんだよ。そういう問題ではないんで

すよ。もう決定したんですよ」
恒夫　「！」
　　恒夫、スックと身を立て、
　　佐伯に詰め寄る。
佐伯　「（退く）うん？何か……」
恒夫　「勝負させてくれ？」
佐伯　「勝負？」
恒夫　「草刈り勝負！」
英子　「？」
柿田　「？」
佐伯　「それで？」
恒夫　「１反の草刈り、早い者が勝ち」
佐伯　「ほほう……で？」
恒夫　「こっちが勝ったら完全に手を引いてもらう」
佐伯　「いやー、小村君、いいのかね」
小村　「それは困ります。公認事業なもので、何なりとカタチにならないと。なかった事には出来ないかと……」
佐伯　「そうだな、でもさ、勝てばいいんだろ、勝てば。何事もなくスムーズに進む。そうだろ。で、君ィ、私が勝ったら」
恒夫　「あなたの自由です」
佐伯　「もちろんだ」
恒夫　「佐伯さん、もう一度、確認しておきたい。私が勝てば、完全に手を引いてくれるんですね」
佐伯　「ああ、そうだよ」
小村　「先生……」
佐伯　「責任は私がとるよ小村君。心配するな、全て任されてるんだ」
恒夫　「判りました」
英子　「……」
柿田　「……」
元治　「……」
佐伯　「ウワッハハハーー、いいねぇ、おもしろい。楽しいじゃないか。俄然、やる気が出ますよ。しかしだなぁ、これは、雇われ人の君の考えだ。肝心の持ち主の女性はどう考えてることやら。呆れてるんじゃ

ないか」
恒夫　「（英子を見る）」
英子　「（恒夫を伺う）」
佐伯　「少し、考える時間あげようか」
英子　「……」
×　×
回想
恒夫　「俺が……助けないといけない」
強引に口で口を塞ぐ恒夫。
×　×
英子　「私たちが勝つわ！」
恒夫　「（笑む）」
元治　「……」
佐伯　「気に入った、気に入った、気に入った！で、こっちのチャレンジャーは次期農場長のリーダー柿田くんにしよう！おい、小村君。彼を呼んでくれ。至急だ！タイトルマッチの挨拶だ！会っていってくれ」
英子　「（呟く）柿ちゃん」
英子に目を遣る恒夫。
×　×
柿田、入って来る。
柿田　「どげんなことー？」
佐伯　「柿田くん、これで、君の将来、安泰だな！」
柿田　「はー？」
佐伯　「草刈だよ。草を刈って、優勝よ！」
柿田　「ナンごと？」
佐伯　「（小村に）君、言ってないのか！」
小村　「まだ何も」
佐伯　「あのな、柿田君。彼（恒夫を示し）と草刈勝負するんだよ。君が！」
柿田　「あっ！あーあ、なんでーぇ？」
佐伯　「まぁいい。後で話す。相手は素人だ。ワッハハハー。見ての通り、皆んな、証人だからな。いいですよね。小村さん」
小村　「ええ、佐伯様が仰るならば滞りなく行くと思いますので、えー、はい」
英子　「じゃ、正々堂々と」
恒夫　「手加減なしで」

佐伯　「決まったな、じゃ、１週間後でどうだ」
恒夫　「（頷く）」
英子　「いいわ」
柿田　「はぁ…？」
佐伯　「で、場所はと…小村君！」
小村　「えー、そうですね……」
英子　「ウチの裏手、どうですか？ボウボウよ」
佐伯　「ほー、そりゃー、好都合だ。決まりだ。いいね、小村君」
小村　「はい！」

◯西風家・庭〜祖父母の部屋
荒れてる家庭用菜園。
畝が潰され、作物が倒れ、
英太の鍬にトマト、キュウリが刺さってる。
洗濯物が剥ぎ取られ、
アチコチに散らばっている。
恒夫　「！」
英子　「！」
元治　「！」
様子を確認しながら、家屋へ、
そして、祖父母の部屋へ。
芳野の傍で眠る英太。
３人　「……」
元治　「オラのかかぁのどこがいいんじゃろうの……」
恒夫、起こそうとする。
元治　「今は、よかろう、オラが見とうとよー」
恒夫　「そんなワケには」
元治　「寝かしちゃれ。いろいろあるんがよ……見守っちゃれ」
恒夫、英子を伺う。
英子　「（頷く）」
恒夫　「（否定）」
恒夫、英太の腕を強引に掴み、
「来い」

引っ張って行く。
英子　「ツネオ！」

◯家庭用菜園
恒夫　「戻せ！」
英太　「……」
動かない。
恒夫、鍬を握らす。
握らない。
恒夫　「（睨む）」
英太　「……」
恒夫、鍬を取り、畝を作り直す。
英太　「……」
英子　「……」
元治　「……」
英太、突っ立ったまま。
窺う恒夫。
英子　「（来て）英太君、一緒にやろうか」
英太、顔を背け、
元治の元へ駆け寄る。
元治　「どげんした」
元治に抱きついたまま、離れない。
元治　「そーかー（英子に頷く）」
英子　「……（恒夫に目配せ）」
恒夫　「（頷く）……」

◯西風家・夕方
バスケットボードを睨む、恒夫、
駆け出し、大きくシュート。
ゴールイン！
恒夫　「（にんまり）」
英子、拍手。

◯農地会場・（試合当日）西風家・裏手
不耕起農地、２反を杭とロープで
左右、１反づつ区切ってある。
【1反（３００坪）
テニスコート（シングルス）の５倍】

アナウンス「皆さまにご報告いたします。寺
田役場長は急遽の東京出張のため欠席とし、

代理は佐伯様がお勤めになりますので、ご
協力の程、よろしくお願いします」

×　　×

中央、日除けテント内で、
佐伯と来賓客が歓談。

×　　×

英子側、佐伯側に別れた村民たち。

×　　×

恒夫と柿田、握手し、睨み合う。
柿田、佐伯を見遣るが、

×　　×

気にも留めず、
来賓客と大笑いの佐伯。

×　　×

目を閉じ、深呼吸の恒夫。

恒夫　「（呟く）いい匂いだ」
傍の、
英子　「（横目で）ウフッ」
恒夫　「（気付き）ン、何だ？」
英子　「恒夫がここに居るなんて、不思
議……」
恒夫　「だな！一番キライな奴がさ……」
英子　「ホント。ヤーナ奴！」

×　　×

物陰で吐く柿田。
背中さする小村。

小村　「頼みますよ」
柿田　「頼むっちゃよ。また、キレイドコ
ロをさ。（ウゲーッ）苦しか……」
小村　「あーーもう～」

×　　×

アナウンス「両者、これよりウォーミングアッ
プタイム、５分です。各々、準備、確認、お
願いします」
草刈機の点検、燃料、
替え刃の確認をする恒夫。
二日酔いの柿田、動作が鈍い。

◯西風家・祖父母の部屋
ウトウトする芳野の傍で、

元治　「だげん、準備ずるから、まっちょれ」
英太　「ばあちゃん、大丈夫？」
元治　「あんまよんなか。眠たかとよ。まだ、
　寝んだよ。寝んだ」
　　英太、芳野の顔を覗き込み、
　　口元に耳を近付ける。
　　英太、頷く。
元治　「どげな？」
英太　「ううん」
元治　「ボウズ、どぎゃんな？」
英太　「行くよ」
元治　「んだ」

◯西風家・表
　　出て来る元治、英太。
　　歓声が響いて来る方を、窺う。
元治　「騒いじょるの～……」
英太　「早よ～」
　　袖を引く。
元治　「車、取っちょるからの」

◯元の試合会場
アナウンス「スタートラインについて下さい」
　　着く二人。
　　始動。
　　各々の草刈り機が唸りをあげる。
　　ピーッ！
　　各フィールドの草が倒れ始める。

◯西風家・庭
　　駐車場。
　　農機具準備の元治。
　　×　　×
　　フラ付く、英太。
　　郵便配達のバイク、来る。
配達人　　「おんまぁ、とこだ。受け取っちゃく
　れんが」
　　取る、英太。
配達人　　「外国からじゃ、渡しておいてくれの」
英太　「何て書いてあるの？」
配達人　　「オラも分かんねえだ。だけんどさ…

…ちょ、貸してみ（受け取る）んだ、アフリカ、ジ、ジリアって書いちょるの。人の名前かのう」
英太　「ふーん」
配達人　　「渡すんだべよ」
　　去って行く。
　　横文字を読む、
英太　「ジヤパン、イー、アイ、ケー、オー……」
　　×　　×
　　そこへ、軽トラ。
　　プ、プー！
元治　「オー、行くべー！」
　　×　　×
英太　「！」
　　咄嗟にポケットにねじ込み、
　　駆けて行く。

◯元の試合会場
　　恒夫、柿田、大差なく進む。
　　×　　×
　　会場の前を走る軽トラ。

◯軽トラ・中
　　会場を見てる英太。
元治　「だけん、ほんまば、応援したくてたまんねえじゃのうー」
英太　「負ければいいのに」
元治　「そなごと言うなぁー」
英太　「だって、大キライなんだ！」
元治　「あだー、負げたら、オラっちの畑も無ぐなるっじゃー」
英太　「あ、あ、ごめん……」
元治　「こがなー争いごと、見だくねぇ」
　　×　　×
　　コンビニを通り過ぎて行く。
英太　「（振り返る）」
　　離れていくコンビニ。

◯元の試合会場
　　１０㍍程先の柿田を追う恒夫。

◯耕作地
太い幹に鉈を打つ元治。
折れる樹木。
英太　「ウワーッ！」
元治　「なんじゃ！」
マムシが英太に襲いかかる。
元治、瞬時に英太を払い除け、
鉈でマムシを打ち殺す。
元治　「大丈夫か？」
英太　「うん」
元治　「噛まれちゃら、イチコロじゃけん
のう。良がったけの」
英太　「（息が荒い）」

◯祖父母の部屋
芳野、寝息の間隔が拡がってくる。

◯元の試合会場
鼻歌交じりで草刈りの柿田、
隣フィールドの恒夫を伺う。
柿田　「（笑む）」
機械を止め、恒夫の所へ。
村民たち「？」
賛成側　　「柿ちゃん、なんしよっと。早く、
戻りゃ！」
柿田　「慌てんでよ。ゆっくり、ゆっくり
さぁ。見てっとみんさい」
英子　「（柿田を目で追う）」
佐伯が慌てて来る、
佐伯　「おい、柿田、どういうつもりだ？」
柿田　「勝てばよかとんでしょ」
佐伯　「まぁな、勝てばいいんだ」
×　　×
黙々と作業する、
恒夫　「ふうう（汗を拭う）」
傍らに来て、
柿田　「（大声で）ご苦労さん。ハンディ
やるさよ、刑事さん」
円盤から目を離さない恒夫。
柿田　「オンら休んじょるこん時間、頑張

っちゃれ。新人の百姓刑事さん」
恒夫、グラッと姿勢を崩す。
柿田　「アチャー、腰、フラついてんじゃー、辛かーねぇ。ほな、戻るっちゃのう」
カキーン！
石に当たり、歯が欠ける。
恒夫　「クーーッ！」
柿田　「（振り返る）あんら、まぁー。どげんしょうかのう。ほんじゃーのー」
振り返り様、来ていた、
英子　「やらしかねー。柿ちゃん、ほんに、変わったさねー」
柿田　「まぁ、そういうなよ。サービスっちゃ」
行く。

◯耕作地
大きなミミズを手に、
英太　「見て、見て。こんなにデケエの」
と落とし、踏む。
元治　「おんまぁー、ヤメェー。殺すんじゃなか」
英太　「？」
元治　「こんミミズ、土ば、栄養与えるだわさ。頼りになるっちゃよ」
英太　「僕より？」
元治　「んだ」
作業を続ける元治。

◯祖父母の部屋
芳野　「フワァーーッ……！（大きく吸い込んで止まる）」

◯耕作地
英太　「！？（ピクン）」
物の怪に憑かれたように
その場から離れる。

◯祖父母の部屋
芳野、動かない。

◯耕作地

作業の手を止め、
元治、空を仰ぎ、一息。

元治　「！？……おい、ボウズ」

辺りを見るが、居ない。

元治　「オイ、ボウズ、英太！」

探し回る。

◯元の試合会場

替刃のセット完了。

恒夫　「よし！」

英子　「あの時、逆転したじゃない」

恒夫　「？……」

英子　「バスケの試合、高校んときさ」

恒夫　「えっ、見てたんだ！」

英子　「悪い？」

恒夫　「あっ、あー……あー」

英子　「たまたまね」

恒夫　「ほう、ほうか？」

駆けて行く恒夫。

英子　「（叫ぶ）あん時みたいにさ、逆転よ！」

恒夫、振り返り、
「（ニッコリ）」

×　　×

草々をなぎ倒して行く、恒夫。

×　　×

鼻歌交じりの柿田。
リズミカルに刈っていく。

◯耕作地

元治、ジムニーに乗り込み、
飛び出して行く。

◯コンビニ

外から、
レジ対応の店長を見計らって、
入って行く英太。

店長　「！」

英太、雑貨コーナーで口紅を
素早く掴み、駆け出て行く。
気づく店長。

店長　「！！（お客に）すんません。これ
（商品渡し）、１２８９円、じゃけん……」
飛び出る、店長。
老人客、カウンターに小銭をばら撒き、
数え始める。
老人客　「ああー、ちょっと、待っとっとなー」
追う、
店長　「おーーい！待っちょれー！」
英太、駆けて行く。
×　×
老人客　「６０、７０、８０、いち、にー……」
×　×
店長　「ドロボー！待てー！」

◯元の試合会場
柿田、ゴール２０㍍の所で、
草刈機から煙が上がる。
柿田　「！？」
賛成側　「おいおい、どうしたんだ？」
反対側　「やったー、行けー！」
佐伯　「何しとるんだ、あいつは！え、小
村くん、何とかしたまえ！」
小村　「私は手を出せません。自分でやら
なければ」
佐伯　「判っとるよ！」
小村の頭を叩く。
手際よく着実に刈って行く恒夫。

◯コンビニ
元治、車を滑らせ、
入って行く。
店長、見当たらない。
元治　「（カウンターの客に）おら、何して
んど？」
老人客　「なな、はち…払うが金、数えてんだ」
元治　「おお、そうが。店長さ、どこさ？」
老人客　「アチャー、分んようなったべや。ま
いっだなー。まだ、一からじゃー」
元治　「店長は？」
老人客　「なんさ。うっせーなー……」

元治　「店長、どこ行っただ」
老人客　　「なんが、こまっけえ小僧、追っが
けて行ったださ。ドロボーってさ」
　　元治、居ない。

◯ある道
　　駆ける英太。
　　遠くに見える彼を追う、
店長　「待て〜〜！」
　　×　　×
　　元治、駆けるが遅い、
　　やっとの事で車に乗る。

◯元の試合会場
　　修理に手こずっている柿田。
　　エンジンが掛からない。
柿田　「（ボヤいてる）どうしたっちゃ、
どこぞー、どこが？ああー、おんまー、
どうするちゃと」
　　かからない。また分解。
　　来た佐伯、鎌を投げ捨てる。
佐伯　「これでやれ」
柿田　「んじゃ〜？」
佐伯　「間に合うだろ。手でやれ」
柿田　「だども、草刈機っちゅう……」
佐伯　「小村、刈ればいいんだろ」
小村　「ええ、早く刈ったほうが勝ちとな
ります」
　　×　　×
　　淀みなく前に進んで行く恒夫。
　　拓けた空間が広がって行く。
　　×　　×
佐伯　「グズグズしてる暇はない。早くや
れ！」
　　中腰で刈って行く柿田。
　　×　　×
　　高速回転で茎を切断する恒夫。
　　×　　×
　　鎌が茎を掻っ切る。
　　×　　×

茎を一瞬に切断する円盤。

◯ある道

息、切れ切れの店長。
「待つんだ！（響かない）」
駆ける英太。
×　　×
追う元治。
チラッと二人が見える。
そこへ、老婆が出て来る。
元治　「アッ！」
ハンドル切る。
電信柱に激突、
畦道に横倒し、
クラクションが鳴り響く。

◯元の試合会場

汗グッショリの柿田、腰を伸ばす。
数㍍の先の恒夫を見遣る。
ゴール間近。７、８㍍程か？
エンジンが唸りを上げてる。
×　　×
柿田　「アジャー！」
全速力で刈っていく。
×　　×
円盤が草を蹴散らして行く。
×　　×
鎌が茎を刈っ切って行く。
×　　×
最後の束、スコーンと切断。
柿田を見遣る、恒夫。
×　　×
腰を屈め、草を掴み、刈っている。
色んな声が混ざって響いて来る。
村民声　「ウォー！ヤッター！」
恒夫　「（呟く）やったー！勝ったー！英子さん！」
柿田、手を止め、
身を起こし、眺める。
×　　×

英子、恒夫と抱き合って喜んでいる。
×　　×
柿田　「……」
佐伯(声)　　「柿田君！」
柿田　「佐伯さん、オラぁ、すまなんだ…」
佐伯　「面倒なヤツだ」
ビンタを張る。
佐伯　「何とかしろ、さもないと何もなかった事にする」
×　　×
歓喜に沸く反対派村民。
罵声を浴びせる賛成派村民。

◯ある道路
駆けたり緩めたりを繰り返す英太。
足を引き摺りながら進む店長。
×　　×
ジムニーの廻りに群がる村民たち。
サイレンが聞こえて来る。

◯元の試合会場
小村　「皆さんお静かに願います。え一、佐伯様からこの試合の結果報告並びにお言葉があります。どうぞ、お話しください」
マイクを手に、
佐伯　「彼、高桑恒夫君は勝った。しかしながら、一方、こちらの柿田君は応急処置もできない機械のトラブルにあった。なので…」
反対側　　「よーく手入れしどかんとー」
「そっちが悪かーよ！」
佐伯　「……仰る通りだ。手入れを怠った。あってはならないことだ。特に百姓にとっては」
反対側　　「百姓とはどがんなー！」
佐伯　「（無視）だから、こうしたい。これは公認事業だ。当然、全てから手を引くということは考えられない」
恒夫　「！」
英子　「！」
佐伯　「もちろん、この私に賛成の皆さん

方もいらっしゃる。でも、反対の皆さんもいらっしゃる。だからどうだろう、一つの改善案だが、現状、確保した農地の広さのままで事業を行う事もできる。わたくしは、それでも一向に構わない。但し、大きな収益は見込めない。中途半端だからだ。それとも、西風さんに農地を提供してもらって確実なものにするか。大きな収益を得れれば、ここは住みよい里山になり暮らしも豊かになるだろう。わたくしは、どちらでも構わない。ここに暮らす、皆さんで決めてくれ。わたくしの方に付くのか、あのお嬢さんの方へ付くのか、あなた達次第だ。もう一度。考えてくれ。以上」

英子　「……」

恒夫　「……」

柿田　「……」

騒然となる村民たち、

英子を取り囲む。

賛成側　「飢え死にだっちゃ」

「一生の願げえだ。コンままだど、何もでげねぇ」

「はよう、売らんけーよ」

反対側　「おんまぁーこそ、なさけねぇ、先祖代々の畑おばさー」

「この一、裏切りモン」

柿田、村民を掻き分け、

英子に詰め寄る。

柿田　「エッちゃん。もうエッちゃんだげの問題じゃなか。皆んな、困るんだわ」

英子　「こんな風に煽ったのは、アイツよ（佐伯を指差す）嵌められたわ」

◯ある道

逃げる英太。

追う店長。

疲れ切ってる２人。

◯元の試合会場

車に乗り込もうとする佐伯を呼び止める恒夫。

佐伯　「（凝視）勝った気分はどうだ？」
恒夫　「（睨んでる）」
佐伯　「まぁ、悔しいだろうな」
恒夫　「畑を返せ。勝ったんだ。約束だ」
佐伯　「聞いてなかったのか、君」
恒夫　「穏便に勧めてくれ。この通りだ」
　　土下座する恒夫。
　　英子、柿田、村民たち、集まってる。
佐伯　「おい、おい、やめてくれ！」
恒夫　「頼む（さらに、額を擦りつける）」

◯試合会場（と西風家）が見える農道
　　逃げる英太。
　　執念で追う店長。
　　「待て〜〜〜」

◯元の試合会場
恒夫　「（ゆっくりと見上げる）」
佐伯　「さっきも言った通り、賛成の人も
　いるんだ。それに、これは、公認事業なん
　だ。君、デカやってたんだろう。それくら
　い判ってるだろうが。まるでガキだな」
恒夫　「（睨見付け）」
　　瞬時に、飛び掛かり、
　　佐伯の首根っこを掴み捩じ上げる。
恒夫　「汚いヤツだ。何、企んでる！」
佐伯　「止めろ。アンタこそ、自分を見な
　さい。何、キレてる。君こそ、心を癒しに
　来たんだろ。汚れた心を……」
恒夫　「！」
佐伯　「真っ当なら、こんなとこ来るわけ
　ないでしょうが」
恒夫　「なに！」
佐伯　「何もないとこに煙は立たないって
　言うでしょう」
恒夫　「アンタもな」
佐伯　「日本の警察も落ちたもんだ」
　　締め上げる恒夫。
佐伯　「殴れ！どうだ、悔しかったら、ど
　うぞ、殴れ！」

英子、止めに入るが、力が強い。
英子　「ツネオ。ツネオ、ヤメて！」
佐伯　「そうそう、盗っ人息子もいるんだ
　って、やるねぇ、暴力刑事さん」
恒夫　「なんだとー！」
握り拳が上がる。
英子　「ダメ、ツネオー！」
×　　×
そこへ、叫び声ー、
店長（声）「ドロボー！捕まえてくれ！」
ヨロヨロと駆けて来る英太。
遥か後方に店長。
×　　×
叫び声に振り返る、
英子、佐伯、会場の村民たち。
が、手を上げたままの、
恒夫　「……（さらに佐伯を睨みつけ）」
拳を振り堕ろす。
間一髪、拳を掴む柿田。
そこを摺り抜け、
西風家へ駆けて行く英太。
目で追う、一同。
恒夫、柿田も見遣る。
追う店長も駆けて行く。
英子　「ツネオ！……」
恒夫　「……」
も、追い駆けて行く。
会場にいた一同も、
野次馬如く駆けて行く。

◯西風家・前～中
英太、慌ただしく戸を開け、
スルリと入る。

◯西風家・外～中、祖父母の部屋
息絶え絶えの英太、
芳野の前で立ち尽くす。
英太、鼻、口元に手を充てがう。
英太　「……」
芳野、息がない。

×　　×
店長　「すまんごと、入りまっずー」
入って行く。
英子、恒夫も続く。
×　　×
来た店長、立ち止まる。
店長　「（唖然）」
英子、恒夫も後方で固まる。
×　　×
芳野の唇に紅を塗る、
英太　「（真剣）」
不器用だが丁寧に塗って行く。
×　　×
玄関に群がる村民たち。
佐伯も。
×　　×
英太、脇目も振らず夢中ー。
店長　「このー！」
ジワリと歩み寄り、
英太を掴み、投げ倒す。
「こそ泥がー！！」
口紅が飛び、転がって行く。
英太、慌てて口紅を掴もうとする、
その手を踏ん付ける。
店長　「ええ加減にせぇえよー！」
英太　「痛ェーー！」
英子　「止めてぇ！」
英子、店長を突き放つ。
指先で口紅を掴む英太。
×　　×
紅をされた芳野の死顔。
×　　×
突っ伏したままの英太。
彼の手から口紅を受け取り、
見つめる英子。
英子　「……（涙が溜まる）」
×　　×
回想
芳野　「英子、もう一度でええけん、キレ
イごと、お化粧してみたっさぁーな」

×　　×
英子も同じ台詞を言っている。
涙を拭い、英太の顔をやさしく包む。
英太　「……間に合わんかった」
英子、思わず抱きしめ、
英子　「大丈夫、大丈夫、大丈夫」
が、蹌き始める、
英太　「ウウウ、ウー、お、おばさん、放して……おばさんも嫌いだ！僕は一人でいい！放っといて」
突き放す。
英子　「英太君……」
店長　「英子さん、もう、よかか。こぎゃんは盗っ人だべさ」
英子　「（睨む）」
店長　「だども……」
恒夫、店長に深々と礼をし、
恒夫　「失礼」
英太を首根っこを掴み、
一緒に土下座させる。
恒夫　「下げろ！頭を下げるんだ！」
英子　「恒夫、恒夫ってば。ちょっと、ねぇ、そこまで、しなくても、恒夫」
恒夫　「店長。すまなかった。またしても迷惑を掛けてしまった、何と言ったら許して頂けるか……すまない。この通りだ」
頭を下げたまま詫びる。
全く動かない傍の英太。
顔を上げ、
恒夫　「失礼します」
恒夫、英太を四つん這いにさせ、
パンツを下ろし、
何度も何度もお尻を叩く。
お尻が赤く腫れあがる。
歯を食いしばる英太。
英子　「ツネオ！もう、よして！」
恒夫の手が止まらない。
英子、掴む。
英子　「ヤメて！」
×　　×

玄関前、
村民Ａ　「また、盗みか」
村民Ｂ　「勝つには勝ったが、でえじょうぶかの一」
村民Ｃ　「んだ、暴力刑事に、盗っ人息子じゃ」
一部始終見ていた、
柿田　「おんまら、見世物じゃねえんだ。帰れ！」
と蹴散らす。
その奥で佇んでいた、
佐伯　「……」
柿田　「（気付く）」
佐伯　「……」
柿田を睨み、踵を返す。
×　×
英子　「お願い！ツネオ！」
恒夫　「……」
英子　「（口紅を手に）これ、母が欲しかったものなの。どうして、判ったの？英太君」
英太　「……」
恒夫　「来い！」
強引に英太を連れ出す。
英子　「ツネオ！」

◯西風家・裏手
恒夫　「ドロボーに成りたいのか」
英太　「……」
恒夫　「黙るな！」
英太　「父さんは……ぼくから、お母さんとお姉さんを奪ったよ……」
恒夫　「奪ってなんかいない」
英太　「……ここに居ないじゃない」
恒夫　「……」
英太　「ぼ……ぼくは一人ぼっち……」
恒夫　「……」
英太　「だから、お金ないから、盗むしかない。悪いってことぐらい知ってる。でも、僕は人を殺してない（睨む）」
恒夫　「（凝視）」

英太　「……何だよ、こんなとこ来てさ、
　　これも父さんの勝手だろ、嫌いだ、嫌いだ、
　　大嫌いだ」
恒夫　「……」
英太　「父さん……」
恒夫　「……」
英太　「僕のせいで、恥、掻くんだもんね。
　盗っ人の父親だって」
恒夫　「何ィー」
　　恒夫の拳が震えてる。
　　見守っていた英子と店長、柿田。
英子　「（店長に）ここのところは（料金を
　握らせる）」
　　店長、受け取り、柿田を見遣る。
柿田　「（頷く）」
　　去る、店長。
恒夫　「英太！」
　　胸倉、掴み上げ、
恒夫　「もう一度言ってみろ」
　　捥がく英太。
　　割って入る英子、
　　「恒夫、止めて。止めるの！恒夫！」
恒夫　「！」
　　掴んでいた手を離す、
英子　「落ち着いて、恒夫。とにかく入ろ」
　　英子、英太を庇い、
　　数人の野次馬を掻き分け、行く。
　　残された恒夫。
柿田　「（気付き）オンマらァ、どギャン
　思っちょる。さっさと行かんしゃい！」
　　野次馬を蹴散らす柿田。
　　突っ立ったままの、
恒夫　「……」
　　そこへ、英太の声が被る…。
　　「でも、僕は人を殺してない」
　　×　　×
　　回想（２年前）
　　バスケに興じ、汗ダクの恒夫と男。
恒夫　「頼むぞ、痛い目に合わせてくれ！」
　　弾けるボールを、

恒夫から奪う男、軽快に動き、
男　「１０日、９時だな」
恒夫から奪う男、軽快に動き、
恒夫　「そうだ！」
男、潜り抜け、再シュート。
決める。
シルエットの男、笑む。
×　×
恒夫　「（呟く）まさか……」

◯西風家・中と外
英子、芳野の死顔を撫で、
「お母さん、良かったね……ごめんね」
傍には英太。
×　×
庭のバスケットボードを仰ぐ、
恒夫　「……」
×　×
回想（２年前）
人影（兄、剣士）が倒れる。
×　×
慌て駆けて来る、
消防団員Ａ「（英子の耳元で）元治さんが…
車、ブツかってさぁ……」
英子　「！？そんな……」
×　×
突っ立ていた恒夫に、
英子　「恒夫！」
恒夫　「（反応しない）」
英子　「恒夫！ねぇ、恒夫。父さんが…？」
恒夫　「ナ、ンだ……」
頬を叩く、
英子　「ねぇ、どうしたの、しっかりして。
ねぇ、ツネオ！」
恒夫　「！」
英子　「聞いてる？」
恒夫　「どうしたんだ」
英子　「お父さん、事故ったのよ」
恒夫　「事故った！」
英子　「様子見に行くから、お母さんのこ

　と、見てて」
恒夫　「あぁ、分かった」
英子　「それと、約束。もう、暴力振るわ
　ないで。英太くんに」
恒夫　「（返事しない）」
英子　「約束して！」
恒夫　「……」
英子　「恒夫！」
恒夫　「ああ！」

◯事故現場
　　転倒してるジムニー。
　　パトカーと救急車。
　　野次馬。
　　担架で運ばれて行く元治。
英子　「父さん……父さん」
元治　「（ウトウト）あっ、英子か……」
英子　「何があったの？ねぇ……」
元治　「おっ！ボウズ、ボウズは、ああ、
　早ようさ、家、家さ。戻りゃーな」
英子　「父さん。もう、戻ってますよ」
元治　「ああ、そうか」
英子　「それよりさ。お母さんが……」
元治　「なんね？」

◯あおぞら病院・病室
　　ベッドで横たわる元治。
　　英子、隣で腰掛け、
元治　「（涙浮かべ）……しゃんなかな。
　寿命じゃね」
英子　「じゃね……父さん……大丈夫？」
元治　「気が抜けちゃったのう……けん
　どよー。ボウズがのー。紅刺すけんか、悪
　かけん、悪かなかけん、分からんちのう」
英子　「いい子よ」
元治　「おんまーも、そうね、生きどった
　らのう、あん子とおんねーじ位じゃなかね」
英子　「ん、まぁ……それよりね。良かっ
　た、良かった。元気で！」
元治　「運、良かとなー、オラは。じゃけ

　ん、畑どうなっちゃー？」
英子　「こんまま……」
元治　「こんままねぇ……」

◯西風家・告別式（２日後）
遺影「芳野」
車椅子から立ち拝む元治。
英子。
恒夫と英太。
拝み、焼香を上げる村人たち。
仕切りを手伝う柿田。
×　　×
佐伯、寺田役場長、
小村、役場関係者来る。
英子に一礼し、焼香を上げ、
速やかに出て行く。
佐伯、柿田にじっくりと詰め寄り、
佐伯　「どういうことなんだ？」
柿田の頬を軽く打ち出て行く。
柿田　「（ピクリ）」
×　　×
式が終わると、
村人たち、そそくさと帰って行く。

◯同・仏間
芳野の遺影を眺めてる英子。
傍らには、
夫、ムクと弟、耕治の遺影。
赤ちゃんの靴。
英子　「……」

◯同・庭
バスケットボード。
ドリブルされ、弾けるボール。
シュート、外れる。
繰り返す、恒夫。
入ったり、外れたり。
何気に見てる英太。
ボールを掲げ、歩み寄る、
恒夫　「やるか」
英太、首を横に振る。

恒夫　「やってみないか。やろう？」
英太　「（黙ってる）」
恒夫　「そうか」
英太　「（頷く）」
恒夫　「そんなに嫌いか？」
英太　「（黙ってる）」
恒夫　「（沈黙）」
再び、シュートを繰り返す。
何度も、何度も。
見てる英太。
インするボール。
イン、イン、イン。
恒夫の形相、
一歪んでゆく。
×　　×
回想
バスケに興じる恒夫と男。
恒夫　「１０日、９時、警護に付く」
シルエットの男が笑う。
男、シュート、決める。
×　　×
銃弾音。
ドキューン。
護衛の兄、剣士の膝が崩れる。
×　　×
恒夫　「まさか？」
×　　×
一元の庭。
シュート。
外れる。
膝を落とす恒夫。
英太、突っ立ったまま、
恒夫を眺めてる。
転がっていくボール、
英太の足に当たり、止まる。
反応しない英太、恒夫を伺う。
×　　×
ボードを見たまま動かない、
恒夫の目に涙が浮かぶ。
×　　×

駆けて来た、
英子　「英太くーん（どうしちゃったの？）」
察して、英太の視線を追う英子。
英子　「（呟く）ツネオ……」
×　　×
気付いた恒夫、慌てて涙を拭う。
×　　×
手を振り、
英子　「ファイト！！」
と、叫び、英太の頭を撫でる。
×　　×
妄想　英子が妻と重なり、
寄り添う英太は微笑んでる。
×　　×
恒夫　「（歪む）」
プップー！
クラクション音。
×　　×
２台の軽トラが止まる。
松林（中年）夫婦「英子さん、ちょっくら……」
英子　「ちょっと待ってて、英太君」
行く。
松林夫婦「もう、売ろっちゅう思ちょるげな。
英子さん、いいがのう……」
倉橋（高齢）夫婦「ワシらもそうなんじゃ。英
子さんもそうしんさい。悪いこと言わんちゃ」
英子　「分かります。でも、ここには、弟の
夢が……」
倉橋夫婦「そんぎゃぁ、判っちょるよ。故郷だ
にゃ、ここは、オラの。承知ごたるさ」
松林夫婦「もうさ、ウチと倉さんとこだけなん
よ。みなさ、向こうさイッちょるけん…こん
ままじゃ、村八分じゃけん、仕方ねえじゃろ。
どじゃろ、英子さん、英子さんも放っておけ
ねぇだばさ」
英子　「……」
後方に立っている恒夫と英太を、
見遣る、
倉橋夫婦「悪いんけど、あん他所の人、どげ
んか判らんでぇ。子供っ子は盗っ人ってい

うんだしのう……」
英子、倉橋を睨み付ける。
松林夫婦「倉さん、それは、ちょっと」
倉橋夫婦「まあ、まぁ、オラはもう、柿ちゃんに言ってきだっさ」
松林夫婦「ええ！倉さん。ああ、ええ、それは、なしてぇ。そうなの。そうなのねぇ」
英子、踵を返し、大きく深呼吸。
恒夫と英太、目を逸らす。
松林夫婦「すまねぇ、英子さん、もう、ウチもついて行けねぇ。許してけれ、英子さん」
英子、突然、その場を離れる。
２組夫婦「！？」
×　　×
英子、バスケボールを取り、
ドリブルを繰り返し、
シュート。
決まらない。
再び、繰り返す、
決まらない。
見ている恒夫と英太。
×　　×
倉橋と松林夫婦。
「（叫ぶ）英子さーん！一緒に、どやろかーー！」
×　　×
続ける英子。
恒夫と英太。
×　　×
２組夫婦「……（去る）」
×　　×
物陰、木陰。
望遠レンズが捉えてる。
英子、恒夫に歩み寄る。
レンズ外すと、
小村　「（笑む）」
×　　×
英子　「恒夫！」
ボールをトス！
受け取る恒夫。

英太を見遣り、ドリブル。
英子を牽制して、
シュート。
外れる。
英子ボールを取り返し、
恒夫のディフェンスを交わし、
シュート。
イン、ゴール。
英子　「ヤッター！」
落ちて来たボールを受ける恒夫。
英子　「あーあ（思いっきり伸びをする）」
ドリブルする恒夫。
英子　「（見て）待てー、ツネオ！」
振り返る恒夫。
英子　「べーっ！」
恒夫　「？」
恒夫からボールを奪い取り、
英子　「（英太に）行くよー！」
ドリブルで駆けて行く英子、
英太にパス。
英太、ボールを抱え見つめている。
英太　「……」
英子　「行けー、行けー、行けー！」
恒夫　「エイタ、行けー！！」
ドリブルを始め、
ゴールに向かって駆け、
シュート。
決まる！
英子　「ヤッター！」
英子、恒夫を見遣る。
恒夫、拳を作り、掲げる。
英太にも笑顔が浮かぶ。

◯ホームページの画面
目を凝らす英子。
寺田、有山村役場長の
写真とタイトル。
『島原、有山村から地方創生「日本を耕す」』

我が故郷、有山から。

【日本の農業はどうすれば報われるのか、
田畑を耕しながら考えて来ました。
本当に気づかないといけないことは、
現場にある悪しき慣習を、不効率を、ムダを
省き、「きちんとお金が儲からなければ始ま
らない」というシンプルな考え方です。
農業を大切にして、経済的に潤う。
これこそ、有山村が目指すもので、若者が安
心して働き暮らすことが出来るのです】

◯西風家・表
西日射す倉庫。
整備屋「ここ、置いとくから。元さん、気ィ
つけんさいね」
元治　「ああ、わがった」
整備屋、軽トラで去って行く。
代車の軽トラの荷台に、
鍬など農工具を積む元治。
そこへ来た、
英子　「何しちょー。慌てなさんなー」
元治　「じゃけん、来たもんで。動かにゃ」
英子　「（溜息）あーあ、やっぱ、敵わん」
元治　「（笑って）そうじゃろ」
英子　「あんねー」
元治　「どがんした？」
英子　「もう売ろうかと思うんわー。どげん？」
元治　「そうか……潮時だな」
英子　「ありがとう」

◯農道を走るジムニー
流れる田畑、荒れ地。
恒夫　「すまなかった。力になれなくて」
英子　「いいの。お互い元気じゃない」
恒夫　「父さんの荒れ地さ」
英子　「どうしたの？」
恒夫　「しばらく手伝うよ」
恒夫を窺い、ハンドルを握りしめる、
英子　「（笑む）お好きにどうぞ」

◯有山村役場・村長室
ノック。

佐伯（声）「佐伯です」
寺田　「（書類見てる）どうぞ」
　　入って来る。
佐伯　「もう、大丈夫ですよ。あの女だけ
　になりました」
寺田　「そうか（頷く）」
佐伯　「ここは田舎です。１人になれば、
　もう、逆らえない」
寺田　「判った、頼んだぞ」
佐伯　「あとは、待つだけです」
　　踵を返し、ほくそ笑む、佐伯。

◯同・新規拡張農地準備室
　　寺田役場長の
　　ホームページを見てる、
佐伯　「いい夢だ」
　　ノック直後、すぐに入って来る、
柿田　「ナンがあるとかのう」
佐伯　「来たか。一体、君はどっち側の人間
　だ！アッチ、行ったり、コッチ、来たり」
柿田　「どっちって？」
佐伯　「私か、西風英子か」
柿田　「……佐伯さんです」
　　佐伯、ラップトップを取り、
　　ホームページを見せ、
佐伯　「見たか？」
柿田　「ウン、まぁ」
佐伯　「『お金が儲からなければ始まらない』
　悪しき慣習、不効率、ムダを省く。とっても、
　いい事書いてある。そうだろう。大きな農場は
　それを叶える。分かってるか、柿田君」
柿田　「んん、そうだ。だげん……」
佐伯　「困るんだよ。まだ、片付いてないのに、
　勝ってにノコノコ、葬式なんかに行くんじゃな
　い」
柿田　「だけん、幼馴染じゃけん」
佐伯　「フフフ、笑わせるな。そんなもんどう
　でもいい。問題は今だ。彼女はジャマなんだ。
　私を妨害する厄介者だ。いつも私の後に尾いて
　こい。勝手な真似をするんじゃない！」

柿田　「（睨み付ける！爆発寸前）」
佐伯　「しかし、まぁあれだな、ワケ分かん
　ねぇ暴力刑事と盗人小僧に、よりによって鼻
　持ちならねえアバズレ女が言い寄るとは、い
　い組み合わせだ！幼馴染なら、なんとかしろ」
　　怒り爆発！
　　柿田、佐伯の胸ぐらを掴み、
　　壁に押し付け、
柿田　「おんまぁー、やっぱー、クソだ！」
　　佐伯をぶん殴り、締め上げる。
佐伯　「ククッ……苦しィ……」
　　トントンとノック音。
佐伯　「（叫ぶ）オー、助け……」
　　入って来た、
小村　「さ、佐伯さん」
　　睨む柿田。
　　後ずさる小村。
佐伯　「き、きみー」
　　小村、引き離そうとするが、
　　吹っ飛ばされる。
　　が、再び、
小村　「柿田さん、いけません。暴力はいけませ
　ん」
柿田　「うるぜー！ひっごんどれ」
小村　「組合長！組合長がなんで、こがんことを、
　柿田さん！」
　　手を止める、
柿田　「くそっ！」
佐伯　「ハー、ハー、ハー、ハー」
小村　「柿田さん」
　　柿田、佐伯から目を離さず、拳を上げる。
佐伯　「やってみろ！」
柿田　「（吠える）ウグゥワァーー！」
　　応接テーブルを叩きつける。
２人　「！」
　　しばらくして、割れる。
２人　「！」
　　出て行く柿田に、
佐伯　「今後、私の前に一切、現れるな！」
　　身なりを整え、

佐伯　「このままじゃ、気分が悪いの一、小村くん」
小村　「は、さようで……（戸惑う）」
佐伯　「どうだ、小村君。若い衆でも連れて、街でパーッとやったらどうだ」
小村　「えぇ？……」
佐伯　「いつでもいい。時期を見計らってさ。柿田くんでも誘ってさぁ。頼むよ」
小村　「！……」
佐伯　「分かるな！」
小村　「（頷く）」

◯同・正門
出て行く柿田の４WD。
しばらくして、
反対側から来る英子のジムニー。

◯同・新規拡張農地準備室
小村、ドアを開ける。
英子、恒夫入って来る。
佐伯　「おおー、これはこれは、どうした風の吹き回しですかな？どうぞ、どうぞ」
小村、ソファーに案内し、
小村　「コーヒーかお茶、どうですか？」
英子　「いえ、結構です」
小村　「そちらは」
恒夫　「要らない」
立ったままの２人。
佐伯　「どうぞ、お掛けください」
英子　「いえ、大丈夫です」
佐伯　「……」
英子　「……私の農地はお渡しします。なので、絶対に無駄にはしないで下さい。価値あるように使って下さい。もちろん、みなさんの分もです」
佐伯　「判っております。本当に賢明な判断をして頂き、これからの村のためになります。これで、前に進めますよ、西風さん。ありがとうございます」
握手を求める佐伯。

無視し、深々、一礼をして、
出て行く英子、
続いて恒夫、
出際に佐伯を伺う。
恒夫　「ズレてますよ」
飾り棚のレースが垂れ、
その上の壁の絵画が歪んでる。
小村、即座に直す。
佐伯　「ああ。これはこれは（微笑）」
恒夫　「（笑む）」
ドアが閉まる。

◯西風家・庭
ジムニー、戻る。
軽トラ、見当たらない。
英子　「ったく父さんたら……」
恒夫　「元気な証拠だよ」
英子　「（溜息）」
菜園に動く影。
恒夫、英子「！？」
こちらに向かって来る、
坂田　「やあ！」
迎える、
英子　「坂田先輩！」
英子　「どうしたの？」
坂田　「監視に来たんだ」
英子　「何、言ってんの。このー！」
坂田　「順調か？」
英子　「この通りですよ。（恒夫を伺い）ね
っ、恒夫！（クスッ）」
英子と恒夫、見比べる。
坂田　「ツネオ！？」
恒夫　「ご無沙汰です」
坂田　「おう、元気そうだな…良かった。で、
英太君は？」
英子　「父と一緒よ」
坂田、頷き、恒夫を見遣る。
恒夫　「（頷く）」
坂田　「そうか」
英子　「畑なんよ」

坂田　「ふーん、仲いいんだ」
英子　「気が合う見たい」
坂田　「良かった。のう、恒夫君」
恒夫　「（頷く）」
英子　「あのー、実は……坂田先輩」
（同時に）
坂田　「で、ちょっといいかな、西風君」
英子　「何か？」
坂田　「後でいい。先どうぞ」
英子　「実は、ご覧の通り、母が、亡くな
ったの」
坂田　「（見回し）…こんな時に悪かった」
英子　「いえ、そんな。いいのよ。逆に来
てくれて嬉しい」
坂田　「ああ、そうか……（改めて）ほん
と、お気の毒に。御愁傷様です。で、大丈
夫か？」
英子　「ええ、この通りです」
坂田　「よかった」
深々、礼をする。
×　　×
仏壇前、芳野の後飾り。
遺影に線香を上げる坂田。
見守る英子と恒夫。
坂田、向き直り、英子に囁く。
「さっきの件だけど、いいかな」
察知した恒夫、出て行く。
坂田、英子に写真を渡す。
『死体を取囲み笑顔でＶサインの少年
兵たち、日本人らしい容貌の少年が銃
を高々掲げている』
英子　「！？」
坂田　「君の息子だ」
英子　「（呟く）ア、キ、ラ……」
坂田　「半年前の写真だ。生きてるそうだ」
英子、喰い入るように改めて見る。
死体を踏んづけて、高笑いの息子。
英子、写真を伏せ、
英子　「……」
坂田　「残念だが、そこに、写ってる死体。

　彼が（殺ったようだ）……」
英子　「（絶句）」
坂田　「大丈夫か？」
英子　「やめて！……ウソ、ウソよ」
　　×　　×
　　ジムニーに凭れ、
　　母屋を見つめている恒夫。
　　×　　×

坂田　「実は黙っておこうとも思った。終
　わったことにすればいいんだと…でも出来
　なかった」
英子　「……」
坂田　「君のことだ。真実を知りたいと思
　って」
英子　「……」
坂田　「知った以上……俺も迷った……」
英子　「……そう、わかった」
坂田　「英子さん」
英子　「……居たんだ、半年前には……」
坂田　「（頷き）今は…」
英子　「でも、今は……ああ、そうだ。英
　太君は、英太君。恒夫！英太は？」
　　急変に、
坂田　「英子さん、英子さん、落ち着いて」
英子　「早く、英太君を探さないと……」
　　飛び出て行く。
　　後を追う坂田。

◯同・駐車場
　　駆けてくる英子。
恒夫　「？」
　　追い駆ける、
坂田　「高桑君、彼女を！」
　　来るなり、
英子　「早く、英太君探さないと」
恒夫　「どうしたんだ？」
　　英子、ジムニーに乗り、
　　エンジンをかける。
恒夫　「待って、僕が運転する」

英子　「いや、私が。早く乗って！」
恒夫　「替わろう」
坂田　「彼に任せろ。西風君」
英子　「もーう、早く乗って！」
　　二人、乗り込む。
　　発進。

◯車内
　　ハンドル握る英子。
　　後部席で見守る恒夫と坂田。
英子　「（呟く）ど、どうして……」
　　スピードが上がって行く。
恒夫　「英子さん、替わろう」
坂田　「西風君！」
　　涙が溢れて、
英子　「……」
　　徐々に速度を落とし路肩に止まる。
英子　「どうして放っておいてくれなかったの？」
坂田　「……すまん、出来なかった」
恒夫　「！」
英子　「（涙が溢れ出る）」
　　車から飛び出し、
　　叫ぶ、
英子　「どうしてーー！」
　　２人、成す術がなく、見守るだけ。
　　拡がる田畑にポツンと、
　　ジムニーと３人。

◯別の耕作放棄地
　　一畝（いっせ）、
　　【30坪・テニスコート(シングルス)の約２倍】ほど草が刈り込んである、
　　手前の軽トラの荷台に凭れてる、
元治　「（叫ぶ）ボウズ、無理するんじゃねーぞ」
　　×　　×
　　遠くで、
　　ムキになって、鍬を振り翳し、
　　次から次へと、叩き付けてる、

英太　「（喚いてる）クソ、クソ、クソー
　ッ、エーイ！」

◯田畑に囲まれた農道
　　走るジムニー。
　　ハンドルを握る、
恒夫　「…」
　　後席に、英子と坂田。
　　英子、窓外を眺めている。
　　×　　×
　　キラキラ光る田畑。
　　鮮やかな緑が流れて行く。
　　×　　×
坂田　「…」
英子　「（２人に）ゴメン」
坂田　「落ち着いた？」
英子　「ええ」
　　ミラー越しに英子を伺う恒夫。
　　田畑に目を遣る英子。
　　流れる田畑。

◯別の耕作放棄地
　　片足を庇いながら来る、
元治　「（叫ぶ）おーい！ボウズ」
　　英太、顔を上げる。
英太　「！」
　　×　　×
　　隣には、
　　手を振る英子、
　　後に続く恒夫と坂田。
　　×　　×
　　鍬に力を込め、
英太　「クソーッ、何だよ、何だよ」
　　辺り構わず叩きつける英太。
英子　「！？」
　　一同、立ち止まる。
英太　「何だよ！何だよ！何だよー！」
　　飛び散る土塊。
　　恒夫、踏み出す。
英子　「（制し）待って」

恒夫　「（見遣る）」
坂田　「……」
　　英子、ゆっくり英太の元へ。
英太　「（呟いている）何だよ、何だよ、何だよ、何だよー」
　　英子、屈み込み、
　　英太を抱き締める。
英子　「大丈夫……大丈夫よ」
英太　「（**捥**がく）離して、離して……父さんは何のためにやったの…ここ居るためじゃないの？勝ったのにさ……」
　　答えず黙って恒夫を伺う英子。
恒夫　「……」
英太　「ねぇ、何のために」
英子　「私のためによ」
英太　「（睨む）」
英子　「英太君のためにも」
英太　「……」
英子　「そして、皆んなのためにも、農地を守ろうとしたんだけど、できなかった」
英太　「じゃ、ダメじゃん」
英子　「ううん、そんなことない。やることやったんだから。立派よ」
　　英太、恒夫を見遣る。
英太　「……でもさ、このままじゃ、僕、どこ行っちゃうの？」
　　英子、英太を引き寄せ、
　　強く抱きしめる。
英太　「ヤメて……」
　　捥がくが諦め、
　　抱かれたままに、荒地を眺める。
英子　「おばさんはね、どこにも行かないで欲しい（恒夫を伺う）……」
恒夫　「……」
英子　「ここに居て欲しい」
英太　「……ここ、耕していいんだよね」
英子　「いいよ」
英太　「じっちゃんの分、頑張らないと」
　　英子、大きく頷く。
　　×　　×

背を向けたままの、
恒夫　「……」
坂田　「強いな」
恒夫　「……」
×　　×
英太　「ああ！……おばさん、ごめん」
英子　「どうしたの」
ズボンのポケットを弄り、
手紙を英子に渡し、
英太　「忘れてたの……」
英子　「（見る）ジリア！」
その場から離れ、
開封して、読む。
『息子さん生きています。
私、会いに行きます』
英子　「……（呟く）生きてます」
坂田に渡す。
英子、英太に駆け寄り、
「いつ、来たの？」
英太　「草刈りの日」
恒夫　「！！！」
素早く英太の前に立ちはだかり、
拳を高々と上げる。
恒夫　「またか！！」
目を伏せる英太。
英子　「止めて！」
震える拳。
英子　「恒夫！そんなんじゃ、何にもならない。血が通ってる人はあなたしかいないのよ。あなたしか、お父さん！」
坂田　「高桑君！」
萎縮してる英太。
拳を下ろす、恒夫。
足を庇い、やって来た、
元治　「ボウズはのー、ゆらゆら、ゆらゆら、しとるっけー、よう見ててあがんとな。あんさん、親でんがなもー」
英子　「英太君、自分から、ゴメンって云ったじゃない。こんな事なかったでしょ。ねぇ、恒夫」

恒夫　「……」
英子　「恒夫！」
坂田　「高桑くん……」
恒夫　「（頷く）」
英子　「（同様に頷く）」
英太　「（英子をじーっと見ている）……」
英子　「いいのよ、続けて」
　　英太、鍬を握り、続きを始める。
恒夫　「（英子を一瞥し）」
　　元治が差し出した鍬を受け取り、
　　英太の横で耕し始める。
　　×　　×
　　見守る英子と坂田。
　　坂田、英子を見て、笑む。
英子　「なに、それ」
坂田　「嬉しいからさ」
英子　「決めた。アフリカ行くわ」
坂田　「ええ！そうか……じゃ、俺も付いて
　行く」
英子　「ううん、私は１人で行く！」
坂田　「命に関わるんだ、ダメだ！」
英子　「私なら大丈夫！」
坂田　「但し、現地で警護を付ける。いいな」
英子　「わかった」
　　坂田、恒夫の傍へ、
坂田　「（深呼吸して）ウラは取れたな」
恒夫　「（窺う）」
坂田　「お前にぞっこんだ」
恒夫　「で？」
坂田　「ホントに強い女性だ！」
恒夫　「もう、いい」
　　と、鍬を思いっきり振り翳し、
　　大地に叩き付ける。
恒夫　「よっしゃー！」
坂田　「おい、無茶するなよ」

◯西風家・仏壇、後飾り前（夕暮れ）
　　芳野（遺影）に手を合わせ、
　　窓外を見る元治。

◯同・庭（夕暮れ）
バスケ興じる４人。
英太、恒夫　対、坂田、英子。
英太シュート。
歓声を上げる恒夫。
笑顔の英子、坂田。
照れる英太の髪を、
クシャクシャにする恒夫。
見つめる英子、
「（涙浮かぶ）」

◯同・庭（夜）
英子　「（見上げてる）……」
満点の星ー。
玄関から出て来る恒夫。
英子　「寝た？」
恒夫　「ああ、じっちゃんとな」
英子　「ふーん、そう、じゃ」
ウイスキーボトルを振り、
英子　「もういいでしよ」
栓を開け、グラスに注ぐ。
英子　「いい匂い」
口に運ぶ。
恒夫　「よすんだ」
英子　「……やってられないもん」
恒夫　「いや、よすんだ」
英子　「恒夫こそ、立派な百姓になったの
にさ、勿体ないね」
英子、グラスを呷ろうとすると、
取り上げる。
英子　「（睨む）したい様にさせて」
恒夫　「止めるんだ！」
英子　「何故？」
恒夫　「君は死ぬつもりだ」
英子　「……（見つめる）」
恒夫　「警官の端くれだ。想像はつく」
英子　「アフリカ……怖い所……」
恒夫　「（頷く）」
英子　「……何かあったら、父をよろしく」
恒夫　「ダメだ」

英子　「！？」
恒夫　「絶対、生きて帰って来るんだ」
英子　「（見つめる）」
恒夫　「約束だ」
英子　「（呟く）やくそく……」
恒夫　「そうだ」
英子　「（頷き）私も人を殺して来たのよ…」
恒夫　「（見つめ、頷く）」
英子　「……だから、もう、帰って来れない
　気がするの……」
　　恒夫、英子の口に手を充てがう。
恒夫　「もう、言うな。俺も人を殺してき
　た。仕事といえども堪らんモンだ。君も…
　…生きてくために仕方なかったんだ。責め
　るな」
英子　「……早く死にに来いと、アフリカ
　が私を呼んでる」
恒夫　「そうはさせない。絶対、帰って来
　い。約束だ！」
英子　「（見つめ）恒夫と約束か、初めて
　の……一番キライだったツネオと…」
恒夫　「不満か」
英子　「不思議……」
恒夫　「やっとこさ、百姓になったのに、
　ホント、勿体ない」
英子　「（見つめる）」
恒夫　「荒地を耕しとくよ。じいちゃんと
　英太とさ」
英子　「その時までお預けね」
　　英子、恒夫のグラスを取り、
　　庭に流す。
恒夫　「……」
　　恒夫、抱き寄せ、
　　熱い口づけ、交わす英子。
　　一度、引き離し、
恒夫　「何があっても戻って来いよ」
　　再び、重なり合う。

◯街のスナック・「輝き」（夜）
　　カウンターで酔ってる、

柿田　「すまんのう。オラがためにさ」
小村　「一緒にやってきたんだから、さあさあ、
　もっと飲んでさ」
　　注ぐ小村。
小村　「カンパーイ！」
柿田　「オウ、ヒーック！」
小村　「柿ちゃんはオラを差別しなかった」
柿田　「……」
小村　「虐めなかった」
柿田　「なんで虐める、理由なかとや」
小村　「ウフ、そう、そう、そう言ってくれる
　んよねー」
柿田　「何いっちょるよ」
小村　「嬉しかよー……」
柿田　「ウフフ、そうねー＿
小村　「耕治君のこと知っとうね」
柿田　「何ね、急にさ」
小村　「柿ちゃん、耕治君と仲良かっとろうも。
　ほいでさ」
柿田　「エッちゃんの弟だもんよ」
小村　「……役場長、有機は好かんてね、耕治
　君が了解取ろうとしたけんね、ダメだったんよ。
　カッカッしとっとねぇー。それで、事故っさよ」
柿田　「んだな、引っ繰り返るってなー、あん、
　耕治がのう。トラクターなめとったもんのう。
　まぁ、しゃあなかんべ」
小村　「たださ、先生がさ、来たっさ頃なん
　だよねー、ちょっと気になってさ」
柿田　「ほんごとか……そうか。んで、佐伯
　が、なんかしよったと？」
小村　「いやーそれは分かんねぇ……ゴメン、
　ゴメン……オラの考え過ぎよ、アハハハ、柿
　ちゃん、飲んでる？」
柿田　「ああ、呑んじょる。呑んじょる。小
　村どんも、どんどん、呑まなー」
　　小村、あるテーブル席に合図。
　　×　　×
　　赤丸、やって来て、
赤丸　「ご無沙汰です、小村さん。先日は
　ありがとうございました。で、こちらは、は

　は一、アンタじゃねえか。次期、農場長だっ
　け？」
柿田　「ウウッ、おんまーわー」
赤丸　「エッちゃん、遣りそこなったっち
　ゃのー。残念でさー」
柿田　「なん！くそー！」
　　小村を窺う。
小村　「（笑む）」
赤丸　「アンさん情けねえからよ、おかげ
　さんでさ、オレ、長だってよ」
柿田　「長？」
赤丸　「そうさね、ボスよ、長さ。あんが
　とさんよ。いつのまにかアンさんの代わり、
　右腕よ。ご苦労なっこっちゃのー」
柿田　「ドゥワァー！」
　　殴る。
　　が、かわされ、
　　青丸たちに捕まえられる。
赤丸　「ナンしやがる。負け犬がよー！外
　で決めちゃるよ、負け犬」
小村　「まぁまぁ、君、止めなさい」
赤丸　「ちょっとだけさよ」
　　引き摺られていく柿田。
　　×　　×
　　表ー、
赤丸　「ほんじゃ、さっきのお返しじゃ」
　　殴る。
　　よろける柿田、反撃。
　　加勢に加わる黄丸、緑丸、青丸。
　　成す術も無く、血だらけになる柿田。
　　見ていた、
小村　「そのくらいで、いいんじゃけん。
　やめとけ！すまんな、先生の命令じゃ。無
　視は出来んのよ。勘弁してくれ。だけん、
　　もう関わんな。頼むでよ」
柿田　「！……」
小村　「行け！」
　　一同行く。
小村　「何度も言うが柿ちゃんはイイ人
　っさ。だれも虐めない。だからさ、いいこ

と先に教えといてあげるよ。こん村も、さぁ…」
柿田　「何だ？」
　　小村、柿田の耳元で囁く。
小村　「佐伯さんちゅう人さ。小さい頃、あん役場長の寺田にさ、いっつものう、よう虐められたんだってよ。だから、虐め返すんだって。こん村もさ、跡形もなく、だいぶ変わるっチャよ。楽しみだっチャ。ほな、気を付けての」
柿田　「おお、どげん変わるちゅうの」
小村　「そんうち、わかるけんの」
　　行く。
　　柿田、立ち上がり、
　　ヨロケながら吐き、立ち小便。
　　そこへ、光芒が……。
柿田　「！」
　　小村の車が去って行く。
　　乗ってる赤丸たち、
　　柿田を嘲笑ってる。

◯有山村役場・外観（数日後）

◯同・新規拡張農地準備室
　　佐伯、続いて寺田、入って来る。
佐伯　「どうぞ」
　　腰掛ける、
寺田　「一歩前進だな。君」
　　対面に座る、
佐伯　「そうですね。これからが本番です」
寺田　「頼みますよ、佐伯くん」
佐伯　「お呼び立てしたのは、一つ、変更して欲しいことがあるんですよ」
寺田　「何だ」
佐伯　「大規模農場はヤメます」
寺田　「！？」
佐伯　「エンターテイメント型のドリームランドを作ります」
　　みるみる紅潮していく、
寺田　「君、何をいってる、佐伯君」

佐伯　「夢のドリームランドを作りたいんですよ。リゾート施設とレジャーランド、アトラクションスペースにラグジュアリーホテル、絢爛豪華、色とりどりだ。（語調が邪険に）で、農場、農場、農場、全くもって、合わんのだよ。論外なんだな。私のコンセプトから外れるんだよ。
寺田　「なんだと！」
佐伯　「だったら、もっと頭を柔らかくして、新エネルギー、太陽光、風力の開発施設、小さな村のことなんかより、日本の未来のために使った方が、イイんじゃないか。国も喜ぶだろうな……まぁ、慌てることはない。時間はある」
寺田　「何、トチ狂ってるんだ。ここは、農業で潤ってるんだよ。レジャー、アトラクション、絢爛豪華？何言ってるんだ。本末転倒だ、君！」
佐伯　「そうですか……では、皆さんに差し上げた協力金、賄賂の件、発表していいんですね」
寺田　「君、それはお互い様だろう」
佐伯　「確か、５０万でしたっけ、１００万……」
寺田　「君！」
佐伯　「この際、西風耕治君のことも全て一緒に、いいですよ」
寺田　「何言ってるんだ、君が企んだんじゃないのか」
佐伯　「そうですが、喜んだのはあなたです」
寺田　「君、何言ってるのか、分かってるのか」
佐伯　「はい、私は別にいいんですよ」
寺田　「（否める）」
佐伯　「別に目的がありますから」
寺田　「一体、何を考えてるんだ」
佐伯　「（薄ら笑い）」
寺田　「！？」
佐伯　「覚えてますか？」
寺田　「？……」

佐伯　「覚えてないでしょうね？」
寺田　「何をだ？」
　　佐伯、両手で顔を覆い隠し、
佐伯　「顔、変えましたからね？」
寺田　「！？」
佐伯　「タ、カ、ハ、シ……」
寺田　「タカハシ？」
佐伯　「散々、あなたに虐められた高橋で
　すよ」
　　佐伯、右頬を強く擦る。
　　５㎝程の線傷が浮かび上がる。
寺田　「……あっ！」
佐伯　「高橋ハジメです。ご無沙汰してま
　した」
　　×　　×
回想　かつての虐めのエピソード
　　放課後。
　　寺田と３人の仲間（小学６年）が、
　　ハジメ（５年）のランドセルを
　　投げ廻し、それを追うハジメ。
　　足を救われ、転ぶハジメ。
　　×　　×
　　小便器に顔を押し込まれ、
　　捥がくハジメ。
　　高笑いの寺田と仲間。
　　振り向くハジメ、
　　右頬に血が滴っている。
寺田たち「ウワァー」
　　駆けて、去って行く。
　　×　　×
寺田　「ああ、あの時の……そうだな、悪か
　った。すまなかった。この通りだ、高橋君」
　　頭を下げる。
佐伯　「（制して）佐伯だ」
寺田　「ああ、すまなかった、佐伯君」
佐伯　「佐伯さんでしょ」
寺田　「……さ、佐伯さん、でも、あれは、
　子供の時のことじゃないか。私も、良い悪
　いの分別がままならなかった時なんだよ」
佐伯　「うるさい！嘘だろ。子供だって分

かることだ。だから、余計にダメなんだ。
全てが、そこから、狂ってしまったんだ。
わかるだろう。寺田の役場長さんよ」
寺田、起立し、改めて詫びる。
寺田　「すまん、この通りだ。何でもする。
勘弁してくれ」
佐伯　「無理かもしれない。あなたは私だ
けではなく、小村君も相当弄ってたらしい
ですね。ネチネチと。だから私が彼を欲し
いとお願いしたんだよ。同じいじめられっ
子はさ、波長が合うんだよね。彼も可哀想
だ。彼こそが役場長、その方がいいんじゃ
ないの。お前みたいなイジメっ子が、地縁、
血縁でヒョウヒョウと役場長だって。笑わ
せるな！」
寺田　「ど、どうすれば、いいんだ」
佐伯　「簡単だ。今言った通り、大規模農
場から夢のドリームランドと計画が変わっ
たと言えばいい。それだけだ」
寺田　「そ、そんな、村が大騒ぎになる」
佐伯　「いいじゃないの。たまには（薄笑
い）」
寺田　「き、君、事の重大さを」
佐伯　「（豹変する）だからこそ、長であ
るお前が説得するんだよ。それが仕事だろ」
寺田　「それじゃ、自滅だ……」
佐伯　「（遮り）いいか、嫌なら、全て、
事のアレコレ発表してもいいんだぞ。それ
でよければ、どうぞ」
寺田　「だ、だめだ。そんなことでは怯ま
んぞ」
佐伯、顎を掴み上げ、
佐伯　「アハハハハハ、貴様はまだ、全然
判っちゃいないな。言う通りにするしかな
いんだよ。選択権なんてないんだ。役場長
さんよ。俺はさ、今でも思い出すんだ。あ
の悪夢を。苦しくて、苦しくて、それはも
う、毎日、怖くて、生きてる気がしなかっ
たんだ。生き地獄だ。判るか？判んねえだ
ろうな。貴様みたいなお坊ちゃんにはな。

でも、これで、やっと、終わる。これから
は、もうお前の言うことは聞かない」
寺田　「私をこんな目に合わせて、無事で
済むとでも思うのか」
佐伯　「オレはもう、どうでもいいんだ。
覚悟は出来てるんだよ」
寺田　「何が欲しいんだ」
佐伯　「分かんねえかー。何も要らん、お
前が苦しめばいいんだ」
寺田　「何だと」
佐伯　「そして、この村の連中も苦しめば
イイ。中には、俺をバカにしやがった連中
もいる。親なしの俺をさ。許しちゃおけね
え」
寺田　「考え直せ！関係ない人もいる」
佐伯　「うるさーい！許せないって言って
るだろう！も一つ、とっても大事なこと、
覚えてるか。オレの妹のこと。俺よりまだ
まだ幼い妹だ！たったの７つ」
寺田　「知らない」
佐伯　「なに、知らないだと……冗談じゃ
ない、お前が虐めたんだぜ」
寺田　「ほんとだ、記憶にない」
佐伯　「アーフー、ほとほと、呆れた野郎
だ。まぁ、いい、後でじっくり教えてやる。
ジワジワとな」
寺田　「な、何を考えてる」
凶器（ナイフ）を取り出す。
寺田　「（後ずさる）」
佐伯　「まだ幼い７つの妹を殺した。大事
な一人の妹を！」
目の前にナイフを翳す。
寺田　「ヒェー！……俺は殺してない！」
軽く頬が切れる。
血が滴る。
佐伯　「怖がることはないんだ。言うこと
を訊けばな。だから、あの場所に夢のドリ
ームランドを作ると言え」
ナイフを手にグルグル、
動き回る佐伯。

寺田　「！！！」
佐伯　「（穏やかに）そうだな、どうして
　も、それが嫌なら、どうだろう、記者にバ
　ラすか？でも、イイぞ。全て終わりだ。俺
　はどっちでもいい。共倒れしようじゃない
　か？どうだ！」
寺田　「ウッ！」
佐伯　「それとも、自殺するか。辛いなー、
　出来なきゃ、事故死に見せかけてやろうか。
　それでもいい、望みは一つ叶えてやろう。
　それとも、潔く、ドリームランドにしてみ
　るか？考えろ。今すぐだ！」
寺田　「ウ、ウ、ウ」
佐伯　「家族の皆さんのこと、思えば、従
　わざる終えないと思うんだがねぇ。役場長
　さん、どうする。しばらくは、私に付き合
　ってもらおう。携帯出してくれないか？」
　　取り上げ、
佐伯　「ホーー、いい携帯だな。来い！」

◯山奥の廃屋の倉庫Ａ
　　放り込まれる寺田。
　　佐伯、歩み寄り、携帯を差し出す。
佐伯　「ほれ」
　　受け取り、プッシュする、
寺田　「（呼び出し）すまない、急に重要
　な会議が入ってな、しばらくは出張だ」
奥さん（声）「はい。わかりました。で、ど
　ちらへ」
寺田　「東京だ。あとは頼むよ」
　　切った携帯を取り上げる小村。
寺田　「（小村に）君も私を騙したんだな」
　　返答せず、
小村　「やって下さい」
　　青丸と黄丸、
　　寺田を椅子に縛り付ける。
佐伯　「発表するまでは大事にしますよ。
　夜は何がイイですか？肉それとも魚？」
寺田　「クソーーー！」
小村　「（睨みつけ）」

佐伯に続き出て行く。
×　　×
佐伯、立ち止まり、
奥に潜む朽ちた小屋Ｂを見つめる。
佐伯　「……」
×　　×
回想　雨漏れする片隅で、
ハジメ（小学5）が、亡くなった妹
（7）を抱きかかえてる。

◯柿田家・庭
農機具置き場兼倉庫の
鴨居で懸垂、
米俵でベンチプレス、腹筋、鍛える、
柿田　「クソーっ！！」
倉庫を覗く、
恒夫　「居るんかー！」
柿田　「！？」
入って来て、
恒夫　「（じっくり伺う）どうした、傷？」
柿田　「ああ、酔っでの、喧嘩ちゃ」
恒夫　「（頷き）佐伯どうしてる？」
柿田　「なんごた？」
恒夫　「気になってな」
柿田　「ああ、知らんど」
恒夫　「そっか。英子さん、農地を佐伯に……」
柿田　「売っ……だどか？」
恒夫　「知らんかったのか？」
柿田　「あー、んだ」
恒夫　「どうして？」
柿田　「なんね？」
恒夫　「こっちこそ、なんね？」
柿田　「実はの……」
鴨居に飛び付き、懸垂し始める。
柿田　「クソっ！」
激しく懸垂を繰り返す柿田、
動きを止め、ぶら下がったまま、
柿田　「捨てられだ」
恒夫　「で、鍛えてんのか？」
柿田　「んだ」

恒夫　「変な考えはよせよ」
　　黙って続ける柿田。
恒夫　「ほら、柿田」
　　動きを止め、振り返る。
恒夫　「これ、英子さんからだ」
　　手紙渡す。
　　『柿ちゃん、ゴメン。今日、アフリカに
　　発ちます。息子に会いに。それまで、
　　喧嘩できないね。待っててね。
　　英子』
柿田　「何で来ねえんだ？」
恒夫　「会うと辛くなる……言ってた」
柿田　「ウワッ！」
　　再び、鴨居に飛び、懸垂する柿田。
　　「ウッ！ウッ！ウッ！」
恒夫　「なに、ムキなってるんだ」
　　柿田、鴨居にブラ下がったまま、
柿田　「ほんに、すぐ、帰ってぐるんか」
恒夫　「当たり前だ」
　　出て行く。
　　再び、始める柿田。

◯飛行機内（アフリカ）
　　窓から見える緑の絨毯。
英子　「……」
　　×　　×
回想　英太、英子に抱きついて、
　　クンクン嗅いでる。
英太　「好きだよこの匂い」
英子　「そう、ありがとう」
英太　「（呟く）母さん……」
恒夫　「英太」
　　英子から離れ、恒夫の元へ。
英子　「これお守り、持ってて」
　　恒夫、受け取る。
　　『嘆きのライオン金貨』
　　英太も手に、
　　「ウワァ〜、キレイ」
英子　「 背中に折れた矢が刺さってるでしょ。
　それはね、自分の大事な人、家族を庇ってる

の。凄いよね。でさ、ライオンはスイス人の
傭兵のことなの。立派でしょ」
＊参考【盾はルイ16世とその家族を表わす】
英太　「傭兵って？」
英子　「戦争なんかで戦う人かな？」
英太　「何で持ってるの？」
英子　「今度、話たげる。ね！」
金貨から目が離せない英太。
英子　「頼むわよ」
恒夫　「いけない。君が持ってないと」
英子　「ううん、持ってて欲しいの。帰ってく
るまで」
恒夫　「何があっても戻ってくるんだ」
英子　「……」
×　　×
キサンガニ国際空港（コンゴ）に着陸。
大地に立つ英子。
英子　「（囁く）武装集団、反革命組織バギラ」

◯回想（数ヶ月前・キサンガニ近郊のある場所）
少年兵に捕らえられたジリア(28)。
少年兵　「日本人と会いたいと」
バギラ(38)「そんな奴はいねえ。こっち来な」
ジリア　「よして！」
数人の少年兵が抑え込む中、
日本人らしき少年兵Ａを見かけて、
ジリア　「ア・キ・ラ！」
振り向く少年兵Ａ。
ジリア　「オーー！（喚く）あなたは日本人、
お母さんがいる！」
気にも止めない少年兵Ａが、
農婦に狙いを定める。
ジリア　「アキラー！ヤメてー！」
バギラ　「黙れ！」
引き金を引く。
突っ伏す農婦。
バギラ、ジリアの顔を舐め回し、
見定めると小屋に引き摺り込む。
×　　×
ジリアの叫声が続き、

やがて、消え失せる。
パンツを整えながら、
バギラ　「命は助けてやる」
ジリア　「（目は虚ろ）」
×　×
集団は家屋を焼き、
５、６才～１０代の少年達を連れ去り、
残りの住民は気紛れに撃ち殺される。
その中にいる少年兵Ａ。
傷ついたジリア、
ぼんやりとその様子を捉えてる。

◯走るボンネットバス（現在・キサンガニ近郊）
流れる赤い大地。
眺める英子ー、
【届いたジリアからの手紙】
「息子さん生きています。
わたし、会いに行きます！」

◯ジリアの家（キサンガニ近郊）
開け放れたドアや窓……、
静かに入る、
英子　「……（呆然）」

◯有山村役場・駐車場
に、滑り込むジムニー。

◯同・廊下
来る恒夫。

◯同・新規拡張農地準備室・表
恒夫、ノブを握る。
ガチャガチャ、開かない。
恒夫　「？」
佐伯（声）「誰だ？」
恒夫　「高桑だ」
開く。
佐伯　「用心しないとな」
恒夫　「失礼する」
強引に入いる恒夫。
佐伯　「何だ？」

恒夫　「決まった以上、あなたの計画を聞きたいんだ。教えてくれ」
佐伯　「あー、こりゃこりゃこりゃ、熱心なことだな。嬉しいね。大事なことだからな。村の皆さんにね、今度、役場長が正式に、発表する。それまで、待ってくれないか」
恒夫　「ほー、なるほど。何でだ、言っても減るもんじゃないだろ」
佐伯　「厳しいな。待っててくれないか」
恒夫　「（頷き）で、あんたがお気に入りの柿田君。何かあったのか。知らないか？」
佐伯　「何か？」
恒夫　「ひどい怪我してたんだよな」
佐伯　「そうなのか？初めて聞いた……」
恒夫　「おいおい、仲間だろ？次期、農場長じゃないのか？」
佐伯　「そうだったが、君に負けたろ。だからさ、彼で大丈夫か悩んでるんだよ」
恒夫　「ふーーん」
踵を返し、ノブを握り、振り返る。
恒夫　「（笑む）……」

◯同・表
掲示板。
「緊急集会説明会」
見ている村民、
恒夫、一瞥して去る。

◯柿田家
柿田、鍛えてる。
×　　×
街宣車が叫ぶ。
◯月◯日、午前１０時より、
アナウンス（小村声）「◯◯ホールにて、新規事業、大規模農場の緊急説明会があります。是非、ご参加下さい」
×　　×
柿田の滴る汗。
繰り返すアナウンス。

◯有山村役場・役員用地下駐車場
街宣車から降りる、
運転手　「ほんじゃ。帰るでよ」
小村　「ああ、気ィつけてな。お疲れさん」
小村、ドアを閉める。
突然、
柿田　「よかね」
小村　「！？」
小村を締め上げ、殴りつける。
ぐったりの小村。
柿田　「こんの嘘つきが！ぜんぶ吐け！」
小村　「ニヤッ！」
柿田、ナイフで頬を撫でる。
血が滴る。
小村　「（蒼白）佐伯の復讐さ。虐められた恨みよ。寺田にさ、恥かかせ、笑い者にさせ、どん底に引きずり落とすんだよ」
柿田　「そがーんこと、大農場とどう関係あるんことかのう？」
小村　「端からそがんモンは作らねえ。夢のドリームランドじゃけん、畑仕事なんか、考えちょらん」
柿田　「なに言っちょうよ。おんまわー！」
小村　「そう言うことなんよ。裏切り者の生贄よ。嵌められたんでよ、役場長はさ、従うしかねえのよ。賄賂で農地、ブン取ってるからさ。そら、佐伯もオラも同罪よ。分かった上でのことよさ」
柿田　「ドリームランドとはどげんこっちゃ？」
小村　「佐伯さんの夢じゃい。オラはどうでもイイけどよ。実現したら役、付けてくれるんだってよー」
柿田、さらにナイフを押し当てる。
小村　「ヒェェェー」
柿田　「耕治どんにどげんかしたか？」
小村　「知っちょろうが、農地欲しかよ。役場長と佐伯が賄賂持ち掛けたが有機有機って纏まらんかった。だからさ、俺が細工したっちょ。うまく事故死になってさホッ

としたっさ」
柿田　「キサーん、小村、このー」
ナイフを捨て、さらに殴る。
小村　「それがよー、英子さん、戻って来てよー。仕切り直しよ。で、柿ちゃんにさぁ、まとめて貰おうとさ……で、こな事にさ」
柿田　「恥を知れーーーオンらにのうのうとあることないこと言いやがって、裏切り者！」
殴る、殴る。
小村　「で、で、でも、柿ちゃんはオラを虐めんかった、これは、ほんとよ」
手が止まる。
柿田　「……」
飛び出て行く、柿田。
見送る小村、
携帯を取り出し、
「柿田が行きます。逃げてください」

◯同・新規拡張農地準備室
ドカドカ入って来る柿田。
駆けつける、
所員Ａ　「柿ちゃん、どげんした、そげん顔」
柿田　「駄まっちょれよ」
所員Ａ　「ちょ、ちょ、どごいぐん？」
ドア開ける。
誰もいない。
柿田　「佐伯、どこ隠れちょー。おんまぁ、男だろ、出て来いさぁ」
居ない。
×　×
役場内を探し回る。
柿田　「居るのはわかっどるどー。出て来がんか、佐伯！」
辺り構わず探し回る柿田。
後を追う所員Ａ。
「ちょっと、柿ちゃん……」
資料室、会議室、応接室、
トイレへと駆け回る。

驚く、廻りの者。
×　　×
焼却炉、ゴミ置場へと、
ヘタリ込む柿田。
付けて来た、
所員Ａ　「どぎゃんしたの柿ちゃん」
柿田　「佐伯はどげんしたの」
所員Ａ　「知らないわさ」
そこへ、
女子所員Ｂがゴミを捨てに来る。
所員Ａ　「佐伯さんどこね」
女子所員Ｂ「急用で東京、行くっでさ、言っ
とっとよー、寺田長と一緒っととさー」
所員Ａ　「だってさ」
柿田　「アーッ！そがんなー」
のっそり立ち、
柿田　「（叫ぶ）ドリームランドじゃー」
所員Ａ　「（呟く）ドリームランド？」

◯同　・表・
掲示板、前。
柿田、トボトボ来て、
「説明ビラ」に気付き、
引っぺがし、破る。

◯小村宅（夕方）
佐伯（声）「君も安心ならんな。発表までは、
家から出るな！」
小村　「……」
小村、携帯を切る。
新たに、プッシュし、
小村　「（呼び出し、出る）頼む！（切る）」

◯柿田家（夜）
寝込みの柿田を襲う、
青丸、黄丸、緑丸。
柿田　「ウー、何しよっとか？」
青丸　「黙ってろ」
殴って、テープで口を封じる。

◯廃屋のボロ小屋Ｂ

柱に縛り付けられてる柿田。
赤丸　「しばらくはジッとしとっとよ！」
テープ剥がす。
蹠き、
柿田　「ハーハー、なんね、貴さん、悪党
が！」

◯廃屋の倉庫Ａ
物音に気付く寺田役場長。
「おーい、誰か居るんか？おーい」

◯廃屋のボロ小屋Ｂ
柿田　「（喚く）くそーくそー……」
慌てて、テープ貼り直す。
柿田　「（テープ越しに）許さんけんね。
殺しちゃる。おんまーらわ！」

◯廃屋の倉庫Ａ
を覗く赤丸。
寺田　「！何んか合ったのか」
赤丸　「うるさい。静かにしろ」
諦め、静まる、
寺田　「……」

◯赤い大地（キサンガニの遠方）
駆けずり廻る英子。
持って来たジリアの写真を見せ、
聞き回るーー英子。
住人　「お～、◯◯医療所に連れて行った」
英子　「ありがとう」
傍の領事警備員(38)を見遣る英子。
警備員　「（頷く）行きましょう」

◯疾走するジープ。
悲壮な英子。

◯板塀の◯◯簡易医療所
に駆け込んで行く英子。
痛々しいジリア。
英子　「オー、ジリア」
と慰る。

ジリア　　「会ったの、会ったのよアキラと」
英子　「！」
ジリア　　「でも、でも…ゴメン、ゴメンなさい」
英子　「ええ、どうしたの……で、どこで？」
ジリア　　「反革命のバギラ……」
英子　「バギラ、武装集団のバギラ…その中
　に、居たのね。アキラが…」
ジリア　　「（頷き続ける）」
　　赤い荒野を眺める、
英子　「もし、私が戻ってきたら…一緒に畑
　しようね。ジリア」
ジリア　　「……エイコ」
　　英子、窓外に目をやったまま、
英子　「（黙ってる）」
　　それを見守る領事警備員。

◯西風家・倉庫から庭（夕暮れ）
　　農具を片付ける恒夫と元治、
　　真紅に染まった空を眺める。
　　×　　×
　　バスケットゴール。
　　英太、ドリブルして、シュート。
　　ボール、グルグル廻り、
　　零れ落ちる。
英太　「アーアー」
　　再シュート。
　　決まらない。
恒夫　「いいか、見てろ」
　　ボールを取り、ドリブル、シュート。
　　決まる。
恒夫　「ヤってみな！」
　　渡す。
　　英太、シュート。
　　決まる。
英太　「ヤッター！」
　　頷く恒夫。
　　元治もニッコリ。
　　畑がキラキラ輝いてる。
　　ーージェット音が裂く。
　　見上げる３人。

飛行機が紅い空を突っ切って行く。

◯現地警察署内（別の日）
警備員　　「知ってんだろ！おい！」
警察Ａ　　「バギラ！関わりたくねぇ。知らねえよ」
警備員　　「居所だよ。居所！」
警察Ｂ　　「しつこいぞ！誰も知らねえよ！」
英子　「行きましょ！」
警備員　　「だな、一息入れよう」
出て行く英子と警備員。
足を引こずり、後をつける
風体の悪い男。
英子　「！？（振り返る）」
男、立ち止まる。

○バール
カウンターでビールを呷る軍人風。
その横に着く英子と警備員。
軍人風に
英子　「すみません。教えて頂きたいんです
けど」
軍人風「フフ（見定める）」
突然、風体の悪い男（33）が割り込む。
英子　「！？」
男、軍人風に謝り、英子を引き寄せる。
割って入る警備員。
男　　「バギラのこと口にしたら駄目だ」
英子・警備員「！」
男　　「繋がってる」
英子　「あなたは何者？」
男　　「ここで落ち零れたフリーの記者だ」
英子　「で、何か知ってるの？」
男　　「ああ、でも、今はこの通り。ボロボ
ロだ。少しお金が欲しい」
警備員　　「冗談じゃない。さっさと言え！」
男　　「私が何で出しゃばったと思う」
英子　「どうしてなの？」
男　　「私も奴が憎い……ここで、知り合った
恋人を殺ったんだ（目頭を抑える）この足もだ」
警備員　　「で、ヤツは何処にいる」

男　　「ヤツを殺るのか」
警備員　　「解らん。会いたいんだ」
男　　「傭兵の山鬼（ヤマキ）、知ってるか？」
警備員　　「ああ」
男　　「仲介人だ」
警備員　　「ありがとう」
　　行く二人。
　　が、英子、戻って、男に札を渡す。
男　　「ありがとう。アイツを殺ってくれ」

◯キサンガニ国際空港
　　到着ロビー。
　　ゲートから出て来る坂田、
　　スルリと背後に付く、
領事官(40)「お疲れ様、急ぎましょう」
坂田　「？」
領事官　　「傭兵、山鬼んとこへ」
坂田　「判った」

◯雑多の中のアパートメント
　　オフィス「山鬼事務所」前、
　　警備員と英子。
　　ノック、トントントン。
　　「カモン」
　　警備員、次に英子、入る
２人　「！？」
　　両端に銃を構えた男Ａ、Ｂ、
　　ニヤケてる。
山鬼(37)「用心しないとさ。ケッケケケケ」
　　前に出て、
警備員　　「バギラと会わせてくれ」
山鬼　「ああ」
警備員　　「少年を探してる」
山鬼　「……で、そのバギラって誰だ？」
警備員　　「知ってる筈だ」
山鬼　「ほ、ほーう」
警備員　　「男に聞いた」
山鬼　「ああ、そうなんだ」
英子　「教えて！」
　　山鬼、英子を見遣り、立ち上がる。

足を引き摺り、前に出る。
山鬼　「こんなヤツか？」
英子、警備員、身構える。
男ＡＢ、素早く２人に銃を充てる。
山鬼、英子を舐め回し、
山鬼　「君か、ミス傭兵、英子。噂はチラホラ。お会いできてうれしいね。ほー、まだまだ、いい身体してるじゃねえか。相当、弄んだらしいな」
英子　「……（目を瞑る）」
山鬼　「俺にも頼むよ」
英子　「……（沈黙）」
山鬼　「タダとは言ってねえ」
警備員、一歩踏み出す。
が、瞬時に男Ａに阻止される。
山鬼　「で、その少年とやらは」
ブラウスのボタンを１つ外す、山鬼。
英子　「！（睨みつけ）私の息子よ！」
山鬼　「（手が止まる）おーーおー！！」
英子、山鬼に蹴りを入れ、
男Ｂの銃を叩き落とす。
山鬼と男ＡＢを相手に、
警備員と乱闘！
ドキューン！ドキューン！
警備員、倒れる。
英子、向けられた銃に手を上げる。
山鬼　「残念だな」
×　　×
その時、
坂田と部下２名が突入。
男ＡＢを倒し、
山鬼を羽交い締めにする。
英子　「！？」
坂田　「やぁ！」
英子　「どうして？」
坂田　「コイツから情報が得られるとわかったもんで」
英子　「それはそうだけど。タイミング良すぎない！」
坂田　「まあね！」

山鬼　「お陰でやり損なったぜ」
坂田　「このスケベ野郎。バギラのセッテ
　ィングしろ」
山鬼　「どうだか……」
坂田　「なにぃ！」
　　力一杯、首を締め上げる。
山鬼　「わ、わかった。判ったよ。でも、
　アイツとなると命がけなんだ……だから
　よ、味見くらい、いいだろう」
　　坂田、再び、締め上げる。
坂田　「このー！」
山鬼　「く、苦しい……よ、よせ……判っ
　たよ…く、く、苦しい。案内するよ」
坂田　「変な小細工はするなよ」
山鬼　「ああ。で、見返りは？」
坂田　「汚ねぇ仕事、黙っててやる」
山鬼　「チェッ」
坂田　「日銭くらいは払うよ」

◯同・廊下
英子　「ありがとう。でも……」
　　頭抱える英子。
英子　「ねぇ、どうして」
坂田　「どうしてって……」
英子　「来て欲しくなかった」
坂田　「居ても立っても要られなくてさ。
　やっぱり、放っておけない。後悔はした
　くないからさ。これから、俺がボディガ
　ードだ」
英子　「ダメ！」
坂田　「仕方ないだろう」
英子　「……」
坂田　「ほら」
英子　「（頷く）」
　　部下に介添えされ、
　　やって来る警備員、
　　「すまない。お役に立てなくて」
英子　「そんな。私は大丈夫。それより、
　あなたの方こそ、ありがとう」
坂田　「手当してやってくれ。あとは俺が」

連れて行かれる警備員。

◯板塀の簡易医療所
病室。
英子、ジリアに報告。
ジリア　「そう、よかった。でも、これから
よね、気を付けてね」
英子　「万が一の事になれば、私の代わり
に農業をしてくれる」
ジリア　「ノーノー、そんなこと言わないで」
英子　「だから万が一……どうなの？」
ジリア　「イエス、イエスに決まってるわよ。
でも、英子と一緒よ！」
傍らで見守っていた、
坂田　「そうだ、一緒だ。俺が居る」

◯柿田家（別の日）
恒夫、ノック。
静寂、無音。
恒夫　「！？」
窓覗く、裏に回り、ノブ廻す。
開く。
ーー居ない。
×　　×
◯コンビニ・中
商品のチェックしてる店長。
恒夫　「店長さん」
店長　「（気付き、邪険に）忙しか、なん
ね？」
恒夫　「柿田さん来てますか？」
店長　「ほー！あんた、仲、悪とかじゃな
かけん」
恒夫　「ま、そこは、もう、大人なんで」
店長　「そうけ。都合よかばいな」
恒夫　「すみません、で、顔見ましたか」
店長　「見なん。柿は毎日来なんよ。なん
ね」
恒夫　「いや、別に。ありがとうございま
した（出て行く）」
店長　「そのうち来るけんじゃなかと」

◯有山村役場・中
所員Ａ　　「小村は休みを頂いております」
恒夫　「（頷き）じゃ、佐伯は？」
所員Ａ　　「はい。居ます」
恒夫　「分った（行く）」
所員Ａ　　「！あの一、高桑さーん、連絡しま
　すので……」

◯同・新規拡張農地準備室・中
　　受話器を握る、
佐伯　「分った」
　　恒夫、ノック。
　　受話器を置き、襟を正す。
佐伯　「どなたかな？」
　　×　　×
恒夫　「高桑だ」
　　×　　×
　　入る恒夫。
佐伯　「どうぞ、お掛けになって」
恒夫　「無事だったんだ！」
佐伯　「何をです？突然言われましても」
　　部屋の様子を見廻し、
恒夫　「ここにも居ないか…家にも居ない、
　電話も通じない…さてと」
佐伯　「……」
恒夫　「知らないか？頼りにしていた柿田
　くん」
佐伯　「ああ～そっちもか、こっちも探し
　てるんだよ、彼には困ったもんだよ」
恒夫　「そうか」
佐伯　「要件はそう言うことか」
恒夫　「おかしかないか？あんたなら知っ
　てるはずじゃないのか。どうだ？」
佐伯　「残念だが…一つ、頼みがある。会
　ったら、言っといてくれ」
恒夫　「？」
佐伯　「（笑んで）話がある。連絡くれと」
恒夫　「……」

◯役場の寮・２棟・２０１号（表）

ドア越しで聞く恒夫。
小村(声)　「知らんごとさ……調子、悪くて休
　んじょるんだよ」
恒夫　「開けてくれないか」
小村(声)　「ちいと、こんまま、帰ってくださ
　いよ」
ドンドン叩く恒夫。
小村、少し開ける。
覗く恒夫。
顔の切り傷を手で隠し、
小村　「こう言う事で……」
恒夫　「なるほど、ひでぇ顔だな」
小村　「ええ、痛くてさ」
恒夫　「そうか」
後ろから羽交い締めにされ、
卒倒する恒夫。
赤丸、青丸、黄丸、
携帯、財布など物色し、取り上げる。
赤丸、ある物を見て、笑む。
『嘆きのライオン金貨』
赤丸　「（頷く）よがのー」

◯廃屋のボロ小屋Ｂ
気を失ってる恒夫、柱に縛られる。
赤丸、頬を張る。
赤丸　「おい、起きんなー！」
気付く恒夫、状況を知る。
赤丸を睨みつける。
恒夫　「お前か！」
赤丸　「しがたねえさ。親分の命令だげん。
　悪か思わんでけろよ」
恒夫、隣りを見ると、
縛られてグッタリの柿田、
ギロリと目だけ恒夫を見てる。
恒夫　「！」
赤丸　「集会、終わるまでさ、ジッとして
　もらうどよ」
出て行く。
恒夫　「おい、どうした？」
柿田　「見だ通りだ。佐伯に、やられだ。

　必ず遣り返すっちゃよ」
恒夫　「そうだな」
柿田　「あいつはさ、村への復讐じゃけん。
　農地じゃなか、ドリームランドって何かを
　作るっちゃよ！寺田さんをさ。生贄に祀り
　上げるっちゃよ」
恒夫　「復讐か……」

◯西風家・居間（夜）
　　時計、９時。
英太　「（見てる）」
元治　「そのうち、けえってくるさ。デカ
　じゃ。心配すな、ボウズ」
英太　「（頷く）」
元治　「寝るべ」

◯コンビニ（次の日）
　　漫画、見てる英太。
元治　「（店長に）タバコ」
　　店長、ピースを取り、
店長　「畑、渡したっとーって？」
元治　「しゃーねー、時代の流れよ」
店長　「そんだな。エッちゃん、悲しんだ
　ろう」
元治　「あー、そだな」
　　入って来た、赤丸たち。
赤丸　「（英太に）オンマ〜。暴力刑事の
　息子っごじゃねえか。たまげたー、ほんな
　ー、盗みに入ったこん所にさー、来れたも
　んよー。どげん根性しとるんかよー」
英太　「（睨んでる）」
元治　「おんめらー、そがん子、イジメて
　なんね！」
店長　「まぁまぁ、元ちゃん、抑えてっさ」
赤丸　「じっちゃんよ、そう粋きたらいで
　かー。カラダに悪かろう」
　　赤丸の胸にぶら下がってる、
　　キーチェーンに
　　『嘆きのライオン金貨』
英太　「！」

飲料水３本とタバコを買い、
赤丸　「ボウズいい子になりんさいよー」
と、出て行く。
赤丸から目を離さず、
英太　「（耳元で）じっちゃん、ライオン！」
元治、見る。
胸にキラキラ光るライオン。
元治　「行くべ」

◯廃屋の倉庫Ａ・前
若衆車、止まる。
×　　×
離れた藪の陰で止まる軽トラ。
窺う元治、英太。
英太　「これって……」
元治　「うんだ」
英太　「ここが！」
元治　「来だくながったけんどよ。ほれ、倉庫の奥んの小屋、あんがろ」
英太　「ボロボロだ」
倉庫Ａに入って行く赤丸たち、
その奥、行き詰まった所に
ボロボロの小屋Ｂがある。
×　　×
別の乗用車が来て、
小村、降りる。
×　　×
元治　「小村っじゃ……」

◯廃屋の倉庫Ａ・前
出て来る、
小村　「行きんさい、役場長さん」
赤丸たちに連行される寺田。
寺田　「きさんまでもが……悲しか」
小村　「あと数時間で解放されるんじゃ。やっとじゃのう、寺田役場長さん。おめでたかー」
×　　×
赤丸、若衆車に寺田を押し込み、
出て行く。

◯藪陰で見ている２人
元治　「役場長さんだがね」
×　　×
残った小村、
奥のボロ小屋Ｂに行き、
塞がれた戸板の隙間から覗く。

◯廃屋のボロ小屋Ｂ（中）
項垂れてる柿田と、
気配に顔を向ける恒夫。
×　　×
その場を離れる小村。

◯藪陰で見ている２人
車に乗り去って行く。

◯廃屋の倉庫Ａ～ボロ小屋Ｂ
倉庫Ａ、窓から覗く元治。
切られた縄と椅子が転がってる。
×　　×
ボロ小屋Ｂ(先程の隙間)から覗く、
恒夫と柿田がグッタリ。
元治　「おい、でいじょうぶか？」
気付く、２人。
恒夫　「ああ」
柿田　「じっちゃんか？」
元治　「そ～だ」
英太　「父さん！」
恒夫　「おう、英太」
元治　「道具取っちゃくるさ。待っちょれ」
英太　「父さん！ライオン金貨、取り返す
からね。絶対に！」
恒夫　「そうだな。英太」

◯有山村役場わかば大ホール（その日・発表当日）
詰め寄る村民。
×　　×
控え室。
縛られた役場長の縄を解く赤丸。
佐伯　「（ニコリ）どうだった、廃屋の居心
地はさぁ」

寺田　「……むむ。すまん。助けてくれ」
佐伯　「そんな事聞いてんじゃねえよ」
寺田　「お願いだ」
佐伯　「うるさい！」
　　ビンタを張る。
佐伯　「舞台に出るしかねえんだよ！」
寺田　「……」
佐伯　「さぁ、どうぞ！」
　　×　　×
　　赤丸たち、強引に、
　　正装の寺田役場長を押し出す。
　　観念した寺田、一歩前に出る。
　　群がる村民の異様な状況に躊躇。
　　後方に立つ佐伯、寺田の耳元で囁く、
佐伯　「ヘタなことしたら、終わりだ。判
　ってるな」
　　佐伯、寺田の背を軽く叩く。
　　寺田、深呼吸し、手を掲げ、見廻し、
寺田　「お集まりの皆さん。まず、謝らな
　ければなりません。『すみませんでした』
　と。申しますのは、この村の自然、里山、
　そして農業を残すことは大切です、しかし
　ながら、断腸の思いで、エンターテイメン
　ト型のドリームランド、名付けて、『夢の
　ドリームランド』こそが、この村に必要な
　エネルギーだと思い、ここに宣言します。
　『夢のドリームランド』をこの村に誕生さ
　せます。。今日のこの日まで、皆様に反感
　されればどうしようと日々思案しておりま
　した。でも、みなさんに明日ある未来を築
　くにはこのプランでしかないと確信します。
　どうか、ご了承願いたく存じ上げます。こ
　のとおりでございます」
　　深々と頭を下げる寺田。
　　騒つき始める村人。
村人１　　「嘘つき！やめろ！」
村人２　　「帰れ！消えろ！」
寺田　「（叫ぶ）み、み、皆さん、冷静に、
　　じっくり、落ち着いて考えてみて下さい…」
　　再び、

「寺田！何言ってんだ！」
「狂ったのか！寺田さんよー！」
村人に混じって、
拡声マイクを掲げ、猿芝居始める、
佐伯　「（叫ぶ）役場長！どういうことで
す。彼らから田畑を取り上げるんですか？」
寺田　「！？君、何を」
佐伯　「何をおっしゃるんです。ワケが分
かりません！」
寺田　「佐伯君、な、なんで？コッチこそ
…何、言ってるんだ！」
佐伯　「皆さん、何ていうことですか。私
も騙されていた。情けない。申し訳ない、
皆さん。この通りだ、私も謝る」
深々、頭を下げる薄ら笑いの佐伯。
傍の小村に、
佐伯　「（囁く）役に付きたければ、寺田
をうまく料理しろ」
と告げ、その場を去る。
×　　×
村人は寺田を取り囲む。
村人１　「おんまーが、知らん訳ねえだろが」
寺田　「聞いてくれ！俺も騙されてるんだ」
村人２　「まーだ、嘘を漕ぐんだべ」
×　　×
寺田を吊るし上げる村人。
村人１　「（喚く）５０万、貰って、賛成し
ただ。だけんど、話が違うって」
村人３　「オラは１００万だ」
村人１　「何だと！どがんな事だ、寺田！」
寺田に群れる村人たち。
小村、輪に入り込み、
小村　「ちょ、ちょ、ちょっと、聞いてく
ださい。みなさん。わたしたちも驚いてお
ります。騙されました。緊急に対処します
ので、今しばらくお待ちください」
「嘘だ！！！！」
小村　「とにかく、落ち着いて下さい」
村人２　「だけん。オンマ～も、あん、そう
だ、佐伯も一緒じゃねぇけ」

村人３　　「おんまーらも、ぐるじゃなかんべぇ？」
村人２　　「んで、佐伯は何処じや、どこ行っだ？」
小村　「そがんなー、どこじゃろか」
村人３　　「ああ、あごだー。あご、走っちょるけん！」

×　　×

役場に向かって、
大通りを突っ切る佐伯。

×　　×

村人達　　「行けー！」
後を追う村人たち。
その隙に逃げる小村。

○　同・表〜大通り
群れをなして駆けて行く村人。
捕らえた寺田も引き摺られて行く。
その時、
軽トラが村人を塞ぐ、
荷台で立ち上がる柿田。
降りる英太、恒夫と元治。
村人１　　「なんね、じゃまじゃけん。どがんのー！」
村人２　　「柿ちゃん、どげんしたの？」
村人３　　「暴力デカじゃ。そんで盗っ人小僧じゃねえの？」
村人１　　「いんま、それどころじゃねえんよ。おら、行けー！」
柿田　「（叫ぶ）待ちねぇ！……騙されたんじゃろ」
村人たち「！？」
柿田　「農業なんかしねえ。あやつら、手めぇの復讐よ。くそ佐伯のよー！」
村人１　　「佐伯！？」
村人３　　「やっぱ、あいつもか？」
村人２　　「小村んもか？」
柿田　「（頷き）そうな。寺田を嵌めたがや。あん畜生はのう、寺田もこん村もメチャクチャしてえんだってよ。あの……耕治

君もよ。あいつらが殺っちょるんよ…事故じゃねえんだ」
寺田を見遣る村人たち。
寺田　「（項垂れる）」

◯回想　モンタージュ
耕治のトラクター転倒！
本体の潰され即死！
血に滲む死顔。

◯元の通り
柿田　「（叫ぶ！）くそー。エッちゃん、許してくれんのー、ごめんよーーー！」
腰を折る柿田。
見守る村人たち。
柿田　「ほんにさ……エッちゃんの言う通りにしてりゃ良かったんだ。うめぇ話なんてねえよな。みんなにも悪がった。この通りだげん」
深々、頭を下げる。
村人１　「柿ちゃん……」
恒夫　「柿田君、もういい。俺にも責任がある。俺が潰す」
駆けて行く。
柿田　「待ってくれ、オラも気が済まねえ」
村人たち「オラもだ！」
叫ぶ声。
柿田　「待っちくれ。けんど、暴力デカ、あっ、違っだ、元刑事に任そ。彼はのう、プロだ。それにだ、エッちゃんが信じていた男だ。彼に任そうや。オラ、素人は足手まといになるだけかんもよ！」
村人たち「わがっだ！だけん、見守るどー」
柿田　「（大きく頷く）」
駆けて行く柿田。
英太、元治、村人も後に続く。
寺田も村人にしょっ引かれて行く。

◯有山村役場・新規拡張農地準備室・中
佐伯、小村、赤丸たち、
出ようとノブを掴んだ時、

ドド、ド、ドと叩く音。
佐伯　「！？」
佐伯、傍の赤丸に、
佐伯　「金は弾む、時間を稼いでくれ」
赤丸　「（頷き、前に出る）」
続く、仲間達たち。
ドド、ド、ドーーン！
ドアが蹴破られ、
仁王立ちの恒夫。
睨みつける柿田。
対する赤丸。
恒夫　「佐伯を出せ！」
赤丸　「うるせえーよ！」
飛び掛かる赤丸たちを、
アッという間に蹴散らし、
佐伯に詰め寄る恒夫。
恒夫　「（睨む）」
佐伯　「何だ、君は、何なんだ。君には関係ない」
村人１　「こいつもだ！」
連れてきた寺田を差し出し、
村人１　「おんまーも、責任とってもらわんとな」
突き飛ばされる寺田、
佐伯の傍に転がり込む。
寺田　「ち、違う。こ、こいつが異常なんだ。変質者だ！こいつの企みだ。俺は、犠牲者だ。何とかしてくれ」
村人２　「おんまーもだよ。気がつかんのが悪いんだよ」
佐伯に迫る、
恒夫　「お前らの卑怯なやり方には、虫唾が走る。村のことなんか何も考えてやしない。てめえの事だけだ。許さん！」
殴る。
吹っ飛ぶ佐伯。
そこへ、立ち塞がる、
小村　「や、やめてください、あなたは、わからないかもしれませんが。虐められるとは、燻っていた復讐心が溜まりに溜まっ

て、鬱憤を晴らすがため、見返してやるた
めに時に爆発しちゃうんです。でないと、
持たないんですよ」
恒夫　「ウルサイ、すっ込んでろ！」
小村　「こんな気持ち、虐められた人間し
か判らないでしょう」
恒夫　「（睨み）……ああ、取り返しがつ
かなくなるって事がな、そして、苦しむ…」
柿田、英太、元治「……」
恒夫　「……だからって、許せるワケがな
い！」
恒夫、小村を突き放し、
間髪入れず、佐伯を締め上げる。
佐伯　「ウ、ウッ、止めろ」
その隙に抜け出ようとする
寺田を阻止する、村人たち。
恒夫　「（睨み）おい、役場長、あんたの巻
いたタネでもあるんだ。最後までいるんだ！」
佐伯　「（寺田に）いじめっ子さんよ。よく、
出世したもんだな！」
寺田　「俺の力だ！」
佐伯　「ふん、親の力だ」
恒夫、佐伯を壁に押さえ付け、
さらに捻り上げ、
恒夫　「つべこべ言わず、吐け。西風耕治君、
彼を事故死に見せかけたのも、お前だろう…」
村人達　「んなー？？？」
佐伯　「何で俺が……あいつだ、小村だ」
柿田に封じられてる、
小村　「何言う。お前が命令したんじゃないか」
佐伯　「寺田さん、どうだったかなぁ。覚えて
るか、あんたじゃなかったか？」
寺田　「貴様！罪をかぶせるな！」
恒夫　「お前はどこまで腐ったやつだ！」
佐伯を壁に叩きつけ、殴る、殴る。
英太来て、
英太　「父さん！」
恒夫　「！？」
英太　「死ぬよ」
手を離す。

グラリと倒れる、血だらけの佐伯。
顔を寄せ、
恒夫　「何か言ったらどうだ」
佐伯　「ククククッ、虐められていたんだ。
……暇があれば、虐められていた。ある日、
あいつらいじめっ子から身を潜めていたら
……い、妹が……妹、まだ、７つだ。妹が
死んだ。マムシに噛まれて死んだんだ。追
い詰められなきゃ、そんなとこなんかには
行かなかったはずだ。俺は必死になって探
して、探してさ。誰も、俺らのことなんて
構っちゃいない、孤児だからなー、で、や
っとのことで、探したんだ。けど、もう、
息絶え絶え。妹がそん時、言った。一度で
いいから遊園地（ドリームランド）行きた
いとさ。クソーッ、そんなことってあるの
かよ。だから、供養のために、ここに創り
たかった、妹が死んだこの地に……お前
らには判らねえよ」
恒夫　「……（寺田を見遣り）」
去り際に、
恒夫　「寺田さん、お前も、もう、どうし
ようもねえな」
英太、元治も後を行く。
佐伯、寺田、小村を、
取抑えてる柿田と村人たち。
赤丸たちも捕まっている。
英太　「父さん、待って！」
振り返る恒夫。
英太、赤丸に近付き、
首に下がる「ライオンの金貨」を指し。
英太　「返してください」
赤丸　「しらねえよ」
英太　「それは僕のです。返して」
赤丸　「欲しけりゃ。力づくで取ってみな」
英太　「僕のです。大事な人から借りてるも
のなんです。お願いです」
赤丸　「だから、力づくで……」
恒夫が踏み出すより早く、
柿田が赤丸にパンチを浴びせ、

「ライオンの金貨」を取り戻し、
柿田　「子どもイジメてどうする。情けねぇ」
英太に渡す。
英太　「ありがとう」
柿田　「大事な人って？」
英太　「英子さん」
柿田　「（照れ笑い）あっ、エッちゃんね」
元治　「よかよか」
恒夫　「（何度も頷く）」

◯ある村・夕方（ワンバ・キサンガニ西方面）
現地担当官(32)のもと、宿泊所に着く。
英子、坂田、山鬼、荷を整える。
山鬼　「あの峠の向こうだ」
坂田　「（頷く）」
山鬼　「たんまり持ってきてるんだろうな。
見せてくれよ（手を出す）」
坂田　「ああ、明日な」
山鬼　「……ケチると命がない」
坂田　「あんたが居れば大丈夫なんだろう」
山鬼　「判ったよ」
踵を返す。
が、振り返り、
山鬼　「頼りにしてくれるのは嬉しいがさ、
今日のディナーは大いに楽しむんだな」
英子　「ヤな奴」
担当官　「明日どう動きましょう。坂田さん」
坂田　「君はここで待っててくれ」
担当官　「えー？でも……」
坂田　「君まで、危険な目に合わせたくない」
英子　「（頷く）」
担当官　「……」
坂田　「もし、戻って来なかったらさ、応援
を
呼んでくれ」
担当官　「ダメです。行きます。あなたが止め
ても行きます。これは、私たちの国で起きた
問題なんです」
坂田　「……」
英子　「……」

担当官　　「お願いです」
坂田　「判った」

◯ 同（夜）
　　落ちそうな星々。
　バルコニーにて、
　　グラスに琥珀色の液体を注ぐ、英子。
　　陰で様子を伺う坂田。
　　グラスを掲げ、
英子　「（見つめる）」
坂田　「……」
　　英子、香りに浸る。
坂田　「……」
　　英子、口元に運ぶ。
　　止めに入る坂田。
英子　「！」
坂田　「止めとけ！」
英子　「怖いの」
坂田　「恒夫が待ってる」

◯密林（次の日）
　　屈強なジェノシデールの
　ボス、バキラ(38)と
　　捕われた男たちの前で、
　　躍り狂ってる青年と十代の少年兵たち、
　　その中にいるアジア系の少年。
　　×　　×
　　密林の陰から、
　　山鬼が差し示す。
坂田　「彼か？」
　　アジア系の少年。
　　見極める、
英子　「（呟く）アキラ……」
　　×　　×
　　バキラが青年、
　　青年がアジア系に指示。
　　いとも簡単に捕われし者、
　　一人を撃ち殺す。
　　×　　×
英子　「アッ！……」

×　　×
山鬼に続き、
坂田と担当官に守られ静かに進む、
英子。
山鬼、立ち止まり、
「止まれ！まずは俺１人で行く」
坂田　「（睨む）」
山鬼　「信じろ。合図したら出て来てく
れ」
藪から出て行く。
×　　×
山鬼　「バキラ！」
仲間が一斉に銃を向ける。
両手を挙げる、
山鬼　「よしてくれ（現地語）」
気付く、
バキラ　「オー。ミスター、ガンマン」
銃を下げろと合図。
互いに歩み寄る。
バキラ、値踏みしている。
バキラ「何だ？」
山鬼、封筒を握らす。
バキラ、覗く。
ドル紙幣の束。
山鬼　「母親が息子を引き取りに来た」
バキラ　「なぜ？」
山鬼　「会わせてくれ」
バキラ　「そんな奴はいない」
山鬼、少年兵Ａを指差す。
山鬼　「あの子だ」
バキラ　「ノーノーノー、大切な部下だ」
山鬼　「あの子は日本人だ」
バキラ「関係ない」
封筒を揺さぶる。
山鬼　「？」
バキラ　「少ない」
山鬼　「頼む。呼んでくれ」
バキラ　「（笑む）」
封筒をポケットに捩じ込む。
山鬼、叫ぶ。

山鬼　「来てくれ！」
　　藪から、坂田、担当官、
　　そして、英子、現れる。
　　バキラの傍に素早く、部下Ａが付く。
　　後方では捕われし者が、
　　容赦無く虐待されている。
　　傍に来た、
坂田　「（山鬼に）大丈夫なのか？」
山鬼　「ああ、その筈だ！」
　　１人の部下が銃を構える。
山鬼　「おいおい、バキラ、会わせてくれ。
　　何もしない。殺りに来たんじゃない」
バキラ　　「用心だ」
山鬼　「彼女が、母親だ」
バキラ　　「はー、ジャポネ……」
英子　「（睨みつけている）」
山鬼　「そうだ、日本人だ」
　　警戒している坂田と担当官。
山鬼　「（坂田に）あそこだ」
　　坂田、見る。
　　バキラの後方、
　　捕われし者を痛ぶる少年兵Ａが、
　　英子を睨んでいる。
英子　「（も、凝視してる）」
　　それを遮る青年が英子を凝視、
青年　「（笑む）」
英子　「！」
　　×　　×
回想　青年、英子を睨み付け、
　　赤ちゃんを奪って行く。
　　「アイツだ。あの目……だったら、あ
　の子はやはり、アキラ……」
　　×　　×
少年兵Ａ「（叫ぶ）ボス！」
バキラ　　「（頷く）」
　　少年兵Ａ、再び、銃を構える。
　　助けてくれと懇願する男、
　　何度もなんどもひれ伏す。
　　少年兵Ａ、撃つ。
　　コトンと倒れる男。

×　　×
英子　「ノーー！」
目を覆う英子。
バキラ　「グッド！ナイスボーイ」
銃を構え直す部下Ａ。
英子を庇い、後退る坂田と担当官。
山鬼　「よしてくれ、会うだけなんだ」
バキラ　「見たか？ナイスボーイだ。やっぱ、渡さない。ダメだ」
山鬼　「話が違う。だったら、金を返せ！」
バキラ　「ダメだ。お前は意地汚い。貰っとく」
山鬼　「クソーッ！」
バキラ　「これでチャラだ。いい時に来たもんだ」
様子を見守る坂田たち。
山鬼　「判ったよ、じゃ」
踵を返し、手を掲げ、去る。
坂田、英子、担当官「！？」
が、振り返り、銃を抜く山鬼。
ドキューン。
ドキューン。
バタリと倒れる山鬼。
続いて、
ボスを庇った部下Ａも倒れる。
バキラ「ノー（瞑目）」
銃を撫でているバキラ。
銃を握り直す坂田。
バキラ、銃を捨てろとジェスチャー。
坂田、少年兵Ａを見つめ、
坂田　「（叫ぶ）ユー、ジャパン、オーケー、ジャパニーズ？」
少年兵Ａ「？？？」
担当官、銃を握り締め、坂田を伺う。
坂田　「（バキラを示す）」
英子　「……」
バキラ　「（青年と少年兵Ａに頷き）ゴー！」
担当官はバキラ、
坂田は青年、
少年兵Ａは担当官を狙い、

担当官とバキラは倒れ、
坂田の腹に弾丸が食い込む。
瞬時、英子は坂田の銃を拾い、
銃を向ける青年を狙い撃ち。
ドキューン！
青年、膝を落とし、屈伏す。
英子　「坂田さん、坂田さん！」
倒れてる坂田に駆け寄る。
逃げて行く少年兵たちの中、
叫び声が突き刺さる。
「へーイ、マ、マ！！」
英子　「アキラ（呟く）」
振り返ると、
銃を構え、立っている、
少年兵Ａ「へーイ」
英子　「……」
英子、ゆっくりと近寄って行く。
少年兵Ａ、引き金に指を添える。
英子も危険を感じ銃を向けようとする。
反射的に指を絞る少年兵Ａ。
ドキューン！
弾けて倒れる英子。
寄って顔を覗く少年兵Ａ。
×　　×
回想　ジリアが浮かぶ。
「あなたは日本人。お母さんがいるのよ」
×　　×
穏やかな、微かな吐息。
英子　「ア……キ……ラ……」
アキラ　「（現地語で）ママ……」
銃声が、轟く。
ドキューーン！
アキラが英子の胸に被さっている。
坂田　「ウ！ウーーン……」
覚醒した坂田、腹の血で現状を知り、
辺りを見廻す。
坂田　「！！！」
腹を抑えながら歩む坂田。
英子をハグしているように
被さっているアキラ。

突っ立ったまま呆然の坂田、
「エ、イ、コ……」
膝間付き、嗚咽。
「すまない……」
英子の死顔は穏やかだ。

◯簡易診療所（キサンガニの遠方・数日後）
杖を付き、来る坂田。
「ハーイ！」
ジリア　「……どうしたの？」
坂田　「大丈夫だ。そっちこそ、どうだ？」
ジリア　「ええ、良好よ」
坂田　「よかった」
ジリア　「で……英子さんは？」
坂田　「……残念なことになった」
ジリア　「ノーノー……（溢れる涙）」
坂田　「私も一緒だった…すまない、助け
られなかった……私だけが…」
ジリア　「……ア、アキラは」
坂田　「彼も死んだ」
ジリア　「……」
坂田　「彼が英子さんを撃ち、彼女が彼を
撃った…」
ジリア　「そ、そんな……（泣き続ける）」

◯長崎拘置支所
薄暗くて長〜い廊下。
看守の後、
杖を付き来る坂田。
×　×
鍵が開けられ、
坂田　「よう！」
恒夫　「坂田さん！」
坂田　「ここに入っているなんて、お前らし
いな」
恒夫　「つい、腹、立って」
坂田　「手加減しろよ。抑えるところは抑え
なきゃ。な」
恒夫　「はいはい」
坂田　「農地の件。事業は無効だ。農地は戻

る」
恒夫　「で？」
坂田　「佐伯、寺田、小村は当然、罰を受け
る」
恒夫　「でないと困る」
×　　×
薄暗い廊下を戻る２人。
坂田の杖が響く、
その音がピタリと止み、
項垂れる恒夫。
坂田　「すまん、守れなかった」
恒夫　「……」
喰い入るように坂田を見る恒夫。
坂田　「とても心配だった。彼女を守る為
に行った」
恒夫　「……」
坂田　「で、でも、守れなかった。彼女を」
深々、頭を下げる。
坂田　「すまん。この通りだ」
恒夫　「坂田さん、頭上げてください…あり
がとうございました」
坂田　「……息子も亡くなった。彼が英子さ
んを……彼女が息子を撃ったようだ」
恒夫　「……（信じたくない）」
坂田　「……至近距離だ。彼女は発砲した銃
を握りしめていたままだった。息子の屍体
は彼女に覆いかぶさっていた。英子さんは…
息子のことを思ってのことだろう」
話し終えると、
恒夫、その場で膝を落とす。
恒夫　「……（嗚咽）」
杖の音が響く。
コツン、コツン、コツン……、
止まる。
坂田　「（呟く）私も守れなかった。辛いが
残された事をやろう。恒夫君」
恒夫　「（見上げる）」
坂田　「航空券だ」
恒夫　「（頷く）」

◯赤い大地（コンゴ）
砂埃を上げ、
駆け抜けて行くジープ。

◯死体安置所
案内人に続き、
元治、恒夫、英太、坂田が
シートに覆われた遺体の前に寄る。
案内人、指し示し、シートを捲る。
元治　「こげんところで１人のう。寂しかよ」
恒夫　「……」
英太　「おばさん、おばさん」
坂田も沈黙。
案内人、隣のシートを示し、捲る。
恒夫　「息子さんか？」
坂田　「ああ」
遅れて、ジリアが入って来る。
ジリア　「ミスター、ツネオ？」
恒夫　「？」
ジリア、手紙渡す。
英子に送った例の手紙だ。
恒夫　「ジリア」
ジリア　「本当に悲しいです。私、アキラ、見つけたの間違いでした。こんなことになるなんて……」
恒夫　「君は悪くない。精一杯頑張ったんだ」
英太、ジリアを見つめている。
ジリア　「（微笑む）」
手を差し出す。
英太も差し出す。
ジリア、握る。
握り返す英太。
恒夫　「乾杯しよう」
”あのウイスキー”を紙コップに注ぎ、
そして、指にウイスキーを湿らせ、
英子の唇に含ませる。
恒夫　「酒を絶った俺なんだが、彼女と約束をしていた。戻ったら、一杯だけ、飲もうと。まぁ、そこは、俺が迎えに来たんだけど。みんな、付き合ってくれ、オレの奢りだ」

ジリア　　「チアーズ、エイコ」
一同　「チアーズ、エイコ」
　　呷る恒夫。
　　口に付け咳き込む、英太。
　　英子の死顔。

◯西風家・表
　　緑輝く畑を前にして、
坂田　「お前はどうする。続けるのか？」
恒夫　「坂田さんが言った。百姓して回復しろ
　と。で、この通り元気になった」
坂田　「そうだな」
恒夫　「かけがえのない故郷になった……彼女
　の土地だ。大切にする」
坂田　「じゃ」
　　新品のバスケットボールを渡し、
　　車に乗り込み去って行く。
　　恒夫、振り返ると、
　　真新しいバスケットゴールが立っている。
　　ドリブルしてハイジャンプ、
　　トライ！
　　ボールがイン！！
　　落ちるボールを受け取る恒夫。
　　×　　×
　　畑では英太と元治、
　　柿田と数人の村人がせっせと働いている。

◯西風家・ダイニングキッチン（１０年後）
　　『西風家ファミリーの遺影』
　　と、【笑顔の英子】を拝み、
　　出て行く、恒夫。

◯拡がる農場
恒夫(49)「組合長、どがんね？」
柿田(49)「どがんもこがんも、広すぎるよーん」
　　遠くでは、
　　日に焼けた逞しい英太(21)
　　トラクターを操っている。
　　緑がキラキラ輝いてる。

2024/1229/完了